

# 龍谷

## Ryukoku



龍谷大学  
RYUKOKU UNIVERSITY

2015 No.80



- 01** | P01  
**Feature Article** 巻頭特集 学長対談  
人類の思想に向きあい 考え抜くことが  
未来に橋をかける  
**中島 岳志** さん × **赤松 徹真** 学長
- 02** | P06  
**5長 News**  
5長後半期事業「第2期中期計画」が始動  
大学改革の「新たな切り口」、具体的な事業  
ラーニングcommons（瀬田commons）がオープン
- 03** | P09  
**Ryukoku Event**  
農学部開設記念 国際シンポジウム  
福祉フォーラム 2015 ほか
- 04** | P10  
**People, Unlimited**  
次回 NHK 朝ドラに出演決定  
大物俳優に負けず存在感アピール  
**竹下 健人** さん 経済学部
- | P12  
**People, Unlimited**  
ネパールに浄土真宗を広めたい  
大地震からの復興をめざし決意新たに  
**ギシン・ウマ・ラマ** さん 文学部
- | P14  
**People, Unlimited**  
もっと政治を身近なものに  
18歳選挙権を見据えたプロジェクト始動  
**深尾 拓史** さん、**松森 雄一郎** さん 政策学部
- 05** | P16  
**Education, Unlimited**  
自然環境と  
人間のなりわいを見つめる  
**中川 千草** 講師 農学部
- | P20  
**Education, Unlimited**  
発掘現場から  
モノや人との対話力を育てる  
**國下 多美樹** 教授 文学部
- | P24  
**Education, Unlimited**  
適切な人のつながりが、  
これからの地域福祉を変えていく  
**筒井 のり子** 教授 社会学部
- 06** | P28  
**World, Unlimited**  
英語は目的ではなく、  
夢を実現するための手段  
**国際学部グローバルスタディーズ学科**
- 07** | P32  
**Event Ryukoku Museum**  
エキゾチックな出会い  
**岩井 俊平** 龍谷ミュージアム学芸員
- 08** | P34  
**News & Topics**  
最新情報
- 09** | P40  
**People, Unlimited 龍谷人**  
京都・大阪でショッパ展開  
ファッションリーダーのメッカ「LOFTMAN」  
**村井 修平** さん 株式会社ロフトマン代表取締役
- | P42  
**People, Unlimited 龍谷人**  
パワードスーツ開発  
人類の夢を叶えるのは若き女性エンジニア  
**松尾 幾代** さん 機械系エンジニア
- | P44  
**People, Unlimited 龍谷人**  
人間の弱さを受け止める  
矯正施設  
**木村 昭彦** さん 法務省 高松矯正管区長
- 10** | P46  
**Book Cafe**  
新刊紹介

# 01 | Feature Article

巻頭特集 学長対談

## 人類の思想に向きあい 考え抜くことが 未来に橋をかける

政治学者

中島 岳志  
×

龍谷大学学長

赤松 徹眞



テレビ朝日の「報道ステーション」のコメンテーターとしても注目される北海道大学公共政策大学院・准教授の中島岳志氏。「リベラル保守」を宣言する若手の政治学者だが、その言葉にはどこか謙虚さや他者を許容するゆとりが感じられる。それは学生時代に出会った親鸞の思想への傾倒からくるようだ。インド研究や近代政治思想を専門としつつ深い仏教観を持つ中島氏と、赤松学長が語り合った。

## グローバル化の課題解決のヒントが アジアの思想にある

**赤松** グローバル化してきた現代において、様々なことがボーダーレスになっていくことについては喜ばしい面もあると思います。しかし、同時に、一定のスタイルに同調していくようなかたちでの国際化は、危惧すべき点もあると思います。ある力関係のなかで生まれてきてしまった基準という意味では、失われるものも多くあるからです。この動きについて先生はどうお考えですか。

**中島** 真理の唯一性ととともに、真理に至る道の複数性を、同時にいかに追求できるか、ということ、京都学派など、近代日本の様々な哲学者が考えてきました。アジアの様々なところ一、ガンディーもまさに同じ事を言っているし、またはヴィヴェーカーナンダという人も同じ事を言っています。そして、この人の「アドヴァイタヴァダ」つまり不二一元という考え方に影響を受けて「アジアは一つ」と書いたのが岡倉天心だったりします。このような19世紀末から20世紀にかけてのアジアの存在論、認識論があります。

多元性について、欧米は、それぞれがただ並び立っている、それを認め合いましょ、という相対主義的な考え方。でもアジアの哲学では、最後のところのメタレベルは一つなんだと言っている。こういった一元的な多元性をみとめる枠組みが、アジアの長い伝統のなかで出てきた思想にあります。これをいかに位置づけ直す事ができるかですね。どうしても「文明の衝突」みたいな議論のなかで、イスラムのテロなど対立構造ばかりが煽られるのですが、その底にある唯一真理はどのように考えられるのか、というのがテーマなんです。

**赤松** おっしゃるように、日本にも明治以降の東洋の思想や哲学の蓄積があります。にもかかわらず、世界進出や経済社会の転向のなかで表面的に動いてばかりで、必ずしも本当のパワーになっていないんじゃないかなと感じますね。欧米への暴走的な同調だけじゃなくて、もっとアジアを意識したネットワークを考えていきたいですね。歴史をみると6世紀に朝鮮半島から仏教が伝わり、7世紀には中国からも入ってきて、その後文化芸術は仏教とともに栄華を極めてきました。そういったなかで培われてきたものが、明治以降も基本的には引き継がれていると思うんですが、現代でももう一度、仏教を軸におき、日本を起点にしてどのようなネットワークが再構築できるかということも考えてみたいですね。日本の戦前の国体論とは違った、先生のおっしゃる多元主義的一元論のようなあり方も、構想できそうですね。それによって外交面でもすこしは視野が広がっていくような気がします。仏教界も積極的に現代へ提言をしていくことが必要かなと思っています。

## 新しい「縁」を捉えることで 仏教はその可能性を発揮できる

**中島** ぜひ龍谷大学の学生には、現代の大谷光瑞になっていただいて、どンドンアジアに出て行って、日本との関係性をしっかり考えてもらいたいですね。彼のスピリットを受け継いでほしいと思います。また、仏教が持っている現代性は非常に大きいと思います。今の時代、自己のアイデンティティを構成しにくいですよね。共同体がバラバラになってしまっていたり、家族のあり方も多様化している。そのなかで「自分」が浮遊している状況です。私自身も20歳前後の学生のときに、「私という存在は一体何なのか」という事について悩みました。しかし、そのときに肩の荷が下りたのは、仏教の考え方に出会ったからです。仏教は簡単に言うと、「そんな私なんていませんよ」と言ってくれている。縁によって自己がどんどん変わりゆく、その現象を引き受けるのが私なのだ、というのが、おそらく仏教の一つのエッセンスだと思うんですが、これで私はとても楽になったんです。絶対的な変わりようのない私はいないんですね。今、就職活動をする、学生は一生懸命エントリーシートを書いて、私はどういうものかというのを伝えていこうと思うんですが、そんなことでわかる私があるなら、西洋哲学もプラトンから苦勞していないわけですよ。そんなもので汲々となって皆悩み込んでいる。でも、仏教というのはもっと大きな視野で私を捉えてくれます。

**赤松** 多くの若者は、立派な自分をつくり上げなくてはいけない、と競争のなかで求められるんですね。それに応じていこうと、自分自身を苦しみ閉鎖的になったり、立ち行かなくなったり。一方で、経済的なシステムのなかでは、欲しいものが欲しいという消費欲とその挫折がある。そのあたりも、仏教を起点にすることで、人間の欲求を見つめ直し、自己の実体化をやわらかく見つめ直すことができる。現代人にとっての考え方の切り口として、仏教は一つの有効なものではないかと思っています。

**中島** 無縁社会と言われますが、例えば一人暮らしのご年配の方が1日にどれぐらい他者と話しているかを調べたデータでは、平均値がたった3分なんだそうです。いろんなところで他者との関係性を喪失した、底の抜けた共同体のなかに皆生きています。仏教は、そのなかにもう一度「有縁」、家族とか昔の共同体とは違う、もっと開かれた関係性をつくっていくヒントを持っていると思います。そのためには、お寺や、そこにつながっていく仏教系の大学が存在感を放つことが、これから大変重要になってきます。新しい共同性のあり方を、仏教の考え方からつくっていける人材が現れてほしいと強く思います。

**赤松** 本学では、今年度から「世界仏教文化研究センター」がオープンしています。アジア仏教文化研究センターと現代インド研究センターのこれまでの成果を受け、もう一度、大学として広い視野で、国内外の仏教研究者に本学を一つのプラットホームにさせていただいて、仏教研究交流をする。また、研究者だけではなくて、仏教を軸に人が交流するあり方へのメッセージを積極的に出していきたい、ということでスタートします。



**中島岳志** なかじま たけし

1975年生まれ、政治学者、歴史学者。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程後期課程修了。専門は南アジア地域研究や近代政治思想史。北海道大学公共政策大学院・准教授。朝日新聞紙面審議委員、毎日新聞書評委員、テレビ朝日『報道ステーション』レギュラーコメンテーターをつとめる。学生時代に親鸞の思想と出会い、指標としている。著書に『「リベラル保守」宣言』（2013年、新潮社）など。連載に「親鸞と日本主義」（『考える人』新潮社）など。



**赤松 徹眞** あかまつ てっしん（龍谷大学学長）1949年奈良県宇陀市生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了、龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。（文学修士）1984年龍谷大学文学部講師、1987年龍谷大学文学部助教授、1998年龍谷大学文学部教授、2005年龍谷大学教学部長、2007年龍谷大学文学部長、2011年4月学長に就任、現在に至る。専門は日本仏教史（日本仏教の歴史的な展開、現代仏教の可能性を研究）。

**中島** 私は現代インド研究センターの長崎暢子先生にとってもお世話になっているんです。研究会にも参加してきました。インドや中国や中央アジアとの関係性のプラットホームという点と、現代社会の課題解決への試みみたいなものが、仏教という柱によってうまく融合することができるならいいなあと強く思います。

## 暗い下宿で膝を抱えて「私とは何か」と悩んだことが 10年後にいきってくる

**赤松** 近年、機能優先で大学の質が評価されるケースが多くなっている気がします。大学はいかなる役割があり、学生はいかに過ごすべき時期か、改めて問われている面があると思うのですが、先生はどのようにお考えでしょうか。

**中島** よく「役に立つこと」というのが大学に要請されますが、役に立つことって、あつというまに役に立たなくなると思っています。今の細かい政策は、おそらく10年もたない。10年経つと人口比など様々なことが変動し、政策も変わる。さらに、人間にとって重要な場面に遭遇したとき、例えば自分のパートナーと、まさに今ちゃんともを言わないと関係が切れてしまうとき、目の前に今にも自殺しそうな友人がいるとき、そういうときにTOEFLのスコアなんて何の役にも立たないですよ。

逆に、暗い下宿で膝を抱えて「俺とは一体何なんだ」と考えたりすることが、10年後役に立ってくるんですよ。本当に役に立つことって、根源的な問題を考えること。それを理解していなくても、「あ、あのとき西田幾多郎を読んで考えた」というインデックスがあること。何が重要なのかという自分なりのマップを持っていること。その要素を集める場が大学です。簿記や資格ばかりやっている、20年後とか30年後に全く役に立たない人材ばかり送り出すことになる、と産業界の人に言わなきゃいけない。仏教とは何なんだと考えている、サンスクリット語の細かい事をやっている、そこに実はすごく重要な大学の叡智があると思うんです。リベラルアーツといわれるものについて、もう一度その意味を見つめてもらわないと、日本の産業界もやせ細っていくでしょうね。

**赤松** 情報社会のなかで、ものを調べる場合のツールも変わってきていますね。書き取ったりして吸収した時代もあったわけですが、ネット検索によって、テキストをじっくりと読み下し解説するという時間の過ごし方もずいぶん失われつつあって、資格を吸収すればいいんだという風潮もありますよね。でも伝統的な、こつこつ積み上げていく学び方も重視しなくてはいけないと思うんです。学生には、半日でもいいから書庫に入って、目に留まったところで立ち止まり、1時間とか30分でも、探している本の周辺で、こんな本がある、こんな本があるというのに視線を注いで、手に取って開いてみなさいと。その瞬間の自分の些細な関心でも、背表紙を見てめくってみると「こんな事が書いてある」と興味が喚起されて読んでみる、というふうに連鎖的に知の広がりが生まれてくるから、学ぶ手法として、ぜひそういう場所に自分の身をおいてみたほうがいい、と伝えたりするんですけれども。

**中島** データで検索したものしか見つからないって、非常にやせ細った世界ですよ。自分で縁を狭めている。古本屋さんや書庫に入って本を眺めてみる、その手触りが、説明できないところですごく生きてくる。そういう身体性を捨てないでほしいと思いますね。私は『親鸞と日本主義』という連載を以前やったんですが、そのきっかけも大阪の古本屋で、右翼思想家の三井甲之の『親鸞研究』を見つけたのが始まりだったんです。「なぜこの人が親鸞研究なんだろう」と。自分の人生の重要なテーマになっていることは、今の検索システムでは出会えなかったでしょうね。

## 農学のような理系の学問に取り組む人こそ、 哲学のエッセンスを学んでほしい

**赤松** 本学は今年で377年目を迎えます。4月に、1996年から瀬田キャンパスにあった国際文化学部を国際学部へ改組して深草キャンパスに移転し、瀬田キャンパスに新しく農学部を開設しました。国内の大学では、「農学部」という学部名称でいくと1980年以来35年ぶりになります。35年の間に、日本社会で、農学分野で、何が変化したのか熟考した結果、「命」をキーワードに、それを支える食と農とその循環を学ぶことで現代を考えようと。それならば、本学が農学部をつくる意味がある、というところでスタートしたのですが、結果として各所から大きな関心と期待を寄せていただいています。日本の社会の地域変動、食の安全・安心、食の循環プロセス、エネルギー問題、食の倫理など、向き合うべきテーマは多様です。

**中島** 私は元農学校の大学に10年勤めたわけですが、農学部の学生が一番面白いんですよ。農学部の学生で僕のところに来てくれる人は、理科系の学問が理科系のなかだけで完結しないということを言っています。先生がおっしゃるように、命というものをどう考えるか、自然と人間関係をどう捉えるべきなのか。農業従事者の問題についても政策論になってきますし、これからどのように地方に分権していくかという政治分野にも関わってくる。農協という協同組合をどう捉えるのかという問題もある。そういうことを考え始めると、文系の学問が必要だということに、彼らは必ずぶつかります。理科系の技術を重視すればするほど、文科系の学問が要る。それらがどう相互的に関係性をつくれるのかが、これからの課題ですね。しかも農学部は、命とか身体といった根源的なテーマと関わってくるので、宗教の問題と密着していると思うんです。ですから龍谷大学に農学部ができるというのは、とっっても心強いというか、「よくぞ」って思いましたね。

**赤松** 5月に教員と学生で田植えをしたんですが、学生にとっては初めての体験、教員も久しぶり、私も50年ぶりでした。研究室だけの研究ではなく、五感を使った学びを重視しています。何かあれば、データの測定の数値がこうだからこうだ、となりがちで、匂いなど身体の五感で学ぶという力が失われている気がします。本学の特徴や資源を活かし、合理化できない身体感覚を大切にしたり、積み重ねられた人類の思想に触れてもらうことで、知識に厚みのある人財を育てていきたいものです。

## 5長（第5次長期計画）後半期事業「第2期中期計画」が始動

龍谷大学では現在、全学の行動計画として「第5次長期計画(2010-19年度)」を展開し、大学改革に取り組んでいます。少子化の時代にあって、龍谷大学の個性を高め特色を示していくとともに、より魅力ある大学として、また、社会からの負託に応える大学として、本学の持続可能性を高めるための事業を展開しています。

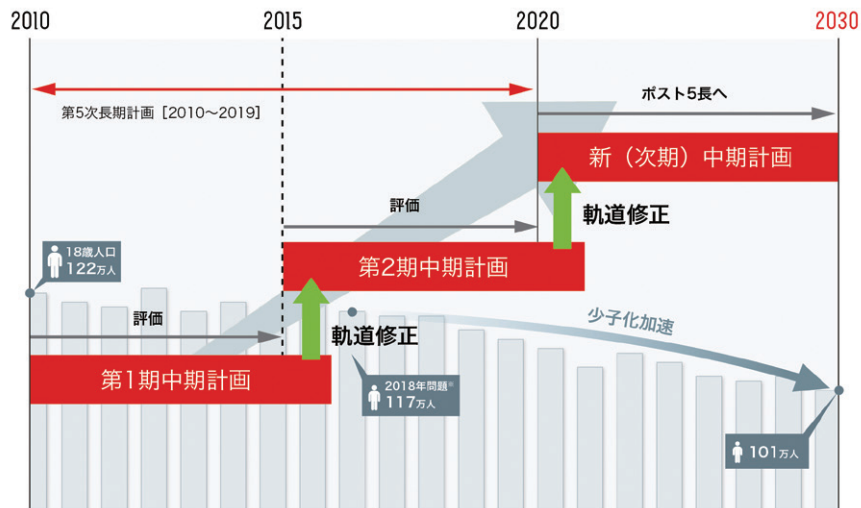
前半期事業として取り組んだ「第1期中期計画(2010-14年度)」では、全学で

55のアクションプランを定め、農学部の新設や国際学部への改組・キャンパス移転など、具体的な事業成果を創出しました。

今年度から展開する「第2期中期計画(2015-19年度)」では、第1期中期計画の成果と課題を踏まえつつ、外部環境の変化や新たな社会的要請を勘案した事業計画として、全学で31のアクションプランを掲げ、5長のグランドデザインで掲げた到達目標「2020年の龍谷大学(将来

像)」の実現をめざしています。同時に、次の時代、すなわちポスト5長期(2020年度以降)における大学の発展につながるものとすべく、全学を挙げた改革の取り組みに着手しました。

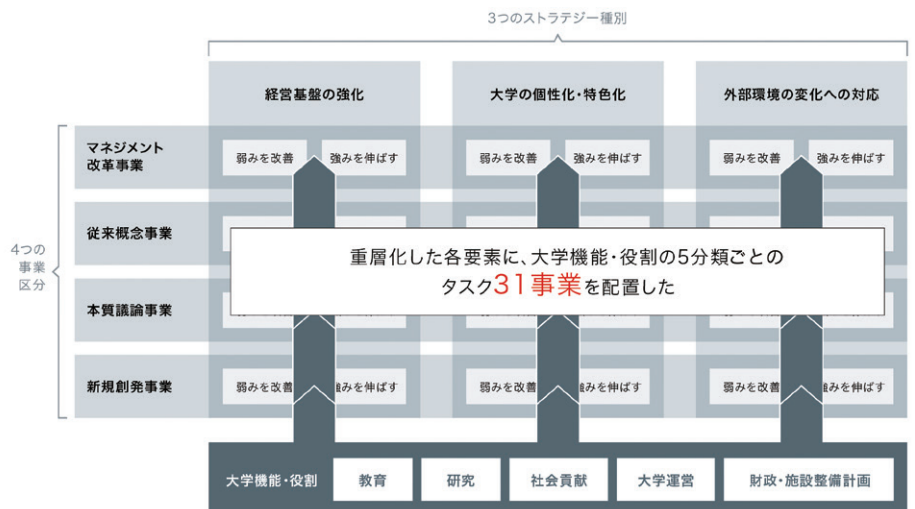
現在、下記の「新たな切り口」のもと、各部局がアクションプランに基づく実施案を策定中です。今後も魅力ある大学づくりに向けた新たな改革を展開していきます。



## 第2期中期計画における大学改革の「新たな切り口」

今年度から展開する第2期中期計画では、「教育」、「研究」、「社会貢献」、「大学運営」、「財政・施設整備計画」の5つの分野から改革事業を定めた従来の手法を継承しつつも、これをさらに発展させた取り組みをおこなうことにしました。

すなわち、「大学改革の切り口」として、4つの事業区分と3つの戦略種別を定め、これらを「強みを伸ばすタスク」と「弱みを改善するタスク」に整理・分類することで、個々の事業特性に応じた政策課題の重層化を図るとともに、より効果的な事業推進をめざしています。





## 第2期中期計画における具体的な事業

第2期中期計画では、全学で31のアクションプランを掲げました。ここでは、前期に取り組んだ新学部の設置や施設・設備の整備を伴う大型投資などよりも、既存の組織や諸制度を改革・改善して、内部充実に努めることに軸足を置いた取り組みをおこなう予定です。具体的には、以下のような取り組みをおこないます。

### (1) 経営基盤を強化するストラテジー

- 大学運営体制の高度化を図るために、意思決定機構の充実に努めるとともに、これを支える事務体制の整備に取り組みます。
- 諸政策を支える大学財政の健全化に取り組みます。
- 中長期的に大学運営や経営を担う将来人材の育成に取り組みます。
- 広報活動面を含めたブランディング活動の実質化に取り組み、本学のブランド力の向上をめざします。



### (2) 大学の「個性化・特色化」を図るストラテジー

- 学年暦や教育プログラムの見直しなど制度的な充実に努めるとともに、カリキュラムの見える化・実質化に取り組み、全学に共通する教学事業の改革を通じた学士課程教育の充実に努めます。
- FDを推進することを通じて教授法の改善を図るとともに、経験学習などの新たな教育手法に積極的に取り組み、個別学部の特徴に応じた教学事業の充実に努めます。
- ラーニングコモンズ機能の充実を図り、学生参画型の「学びのスタイル」を実現します。同時に、学生ポートフォリオシステムの導入・活用などを通じて、学生の自立かつ主体的な学びを支援し、包括的學生支援体制の整備に取り組みます。
- 課外活動の充実に取り組み、東京オリンピック・パラリンピックを視野に入れた選手の育成・サークルの支援に取り組みます。
- 全学の国際化に向けた取り組みを支援し、グローバル化時代に応じた大学運営を実現します。
- 奨学金制度の充実、奨学金によらない経済支援方策の導入などを通じて、学ぶ意欲の高い学生がさらに向上心を高められるスキームを構築します。
- キャリア支援の強化及び高度化に取り組みます。
- 新たに設置した農学部の教学資源を含め、特色ある研究に取り組み、本学ならではの研究成果の創出を図ります。
- 教育・研究両面の成果を地域社会へ還元することを通じて、「地域に根ざした大学づくり」に取り組みます。
- 校友組織との包括的な連携に取り組み、大学・校友・学生の三者があらゆる活動において、三位一体となった連携を図る体制を構築します。



### (3) 外部環境の変化へ対応するストラテジー

- 大学院のあり方を見直し、社会的要請に適応した抜本的な改革を施します。
- 入試戦略の再構築を図り、持続可能な入試制度改革を施します。高大接続や地域戦略の強化、付属平安中高との連携強化に取り組みます。
- 環境の変化に柔軟に対応した事務体制の整備及び大学アドミニストレーター人材の育成に取り組みます。
- 3キャンパスの拠点機能を明確化するとともに、大阪梅田キャンパス、東京オフィスの充実に努めます。



## 多様な学びの空間

### ラーニングコモンズ(瀬田コモンズ)が9月14日オープン

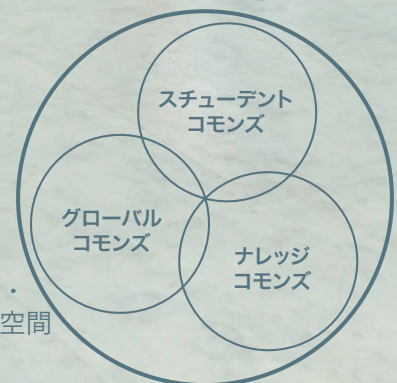


瀬田キャンパスの智光館・図書館に、ラーニングコモンズが9月14日にオープンする。

ラーニングコモンズは、学生による「多様な学びの空間」を全体のコンセプトとし、「スチューデントコモンズ」「グローバルコモンズ」「ナレッジコモンズ」の三つの機能から構成され、それぞれの特徴を活かし、学生の主体的な学びや活動を支援していくものである。

2015年4月1日より深草キャンパス和顔館1階に開設した深草コモンズは、ラーニングクロスローズ、インターナショナルラウンジ及び図書館グループ学習エリアの発展型として展開する空間となっているが、瀬田コモンズでは、ライティングセンターや理工学部初年次学習支援センター、イングリッシュラウンジなどの学修支援機能も包摂した新たな学びの空間を展開していく。

学生による、「学び」の創造と交流の空間



国を超えた  
マルチカルチャル・  
マルチリンガルな空間

学生が主体的に、「調べ」「考え」「書き」「創る」  
知の空間

# 03 | Ryukoku Event

農学部開設記念 国際シンポジウム

## 「新しい農学の可能性」

「植物系分野」「食品系分野」「農業経済系分野」の3分野において、それぞれ第一線で活躍する講師による招待講演がおこなわれ、当日は、会場内が満席となる約300名が来場した。

日時：2015年5月31日（日）会場：龍谷大学響都ホール 校友会館

《招待講演》

「植物バイオマス研究はグローバルなエネルギー問題を解決できるか？」  
カール・ダグラス博士（カナダ・プリティッシュ コロンビア大学教授）

「キッチンの科学 -これまでの長い歴史と最近の再発見-」  
ハロルド・マギー博士（米国・食品科学ライター）

「人類学というレンズを通して見る食料と農業 -グローバルな結びつきとローカルな結果-」  
ヨハン・ポティエ博士（ロンドン大学名誉教授）



福祉フォーラム2015

## 「新しい社会共生のあり方を探る ～貧困問題を手がかりに～」

新しい社会共生のあり方を探るとともに、貧困をテーマに多様な領域で実践活動に携わる支援者から報告をいただき、福祉の現代的展開の可能性を考えた。当日は220名の方々にご参加いただいた。

日時：2015年7月26日（日）会場：龍谷大学大宮キャンパス 東覺 103 教室

《基調講演》

「新しい社会共生のあり方を探る ～貧困問題を手がかりに～」  
湯浅 誠氏（社会活動家/法政大学教授）

《シンポジウム》

「現代福祉課題への新しい挑戦 -龍谷大学卒業生が語る-」



経済学部

## 「京都老舗の会×龍谷大学 コラボレーション講義」

経済学部「地域活性化プロジェクト 京都ものづくり」講義にて、「京都老舗の会」とのコラボレーション講義を開催。老舗が代々受け継いできた伝統と新しいものづくりへの挑戦について、それぞれの業種ごとに老舗経営者の方などからご講演をいただいた。

日時：2015年6月17日（水）～7月22日（水）

会場：龍谷大学深草キャンパス 22号館 104教室

6/17（水）玉置 万美氏（京麩製造：半兵衛麩）

6/24（水）井上 剛宏氏（造園：植芳造園）

7/08（水）宇佐美 直治氏（表具：宇佐美修徳堂）

7/15（水）稲岡 亜里子氏（蕎麦：本家尾張屋）

7/22（水）堀 智行氏（金箔：堀金箔粉株式会社）



大宮図書館 2015年度秋季特別展観

## 「むかしの科学あれこれ」

この秋、大宮キャンパスで、仏教の世界観を表現した天体儀の一つである「縮象儀」（今回展示にあたり修復と機械部分の復元）と日本や中国の暦、その他自然科学の書物など数十点を展示する特別展を開催する。

日時：2015年10月14日（水）～22日（木）

会場：龍谷大学大宮キャンパス 本館 展観室



縮象儀

田中儀右衛門（田中久重）製作  
1847（弘化4）年着工、1850（嘉永3）年完成

# 04 | People, Unlimited

## 次回NHK朝ドラに出演決定 大物俳優に負けず 存在感アピール

竹下 健人さん  
経済学部4年生

国民的ドラマの代表格、NHK朝の連続テレビ小説に本学4年生の俳優・竹下健人さんの出演が決まった。9月からスタートする「あさが来た」は朝ドラ初の幕末が舞台。激動の時代の大阪で、日本初の女子大学設立に尽力した実在の人物・広岡浅子をモデルとした物語だ。ヒロイン役の女優、波瑠をはじめ、宮崎あおい、寺島しのぶ、玉木宏、風吹ジュン、萬田久子…と豪華な出演キャストも話題になっている。そんななか竹下さんが演じるのは、主人公が嫁ぐ大阪の両替商「加野屋」の使用人、弥七。「真面目だけどおっちょこちょいで、いつも走り回っている弥七は、見る人にくすっと笑いを起こし、場面のアクセントとなる役柄です」。大学入学と同時に芸能活動をスタートした竹下さん。新人の登竜門ともいわれるNHK朝ドラに芸歴わずか4年で出演とは、なかなかのものだ。「僕は本当に運がいい。ものすごいチャンスがやってくるぶん、プレッシャーもあるけれど、一つひとつ越えていくことが次のチャンスへとつながると思うとやる気がでています」

6月から大阪のスタジオで収録がスタートした。ドラマ出演は初めてという竹下さんにとって、撮影現場は驚きの連続だったという。「週1回、全出演者が集まって台本の読み合わせや動きの確認

をするのですが、みんな台本を一切見ないんですよ！ものすごく長い台詞でも全部暗記してこられるのです。それに比べたら僕の台詞は少ないのですが、目の前に波瑠さん玉木宏さん、その横に風吹ジュンさんがいらっしゃるだけでも頭が真っ白(笑)。しかも弥七は大阪の商人なので、すべて台詞はかつて商家で話されていた船場言葉です。大阪生まれ大阪育ちの僕がいつも話している大阪弁ともイントネーションが全然違うので、音を覚えるのにも苦労しています。また、撮影はストーリーの流れとは無関係に場面ごとにおこなわれるので、10年後のシーンを撮ったと思ったらまた序盤に戻ったり、と時間軸が前後します。その都度、役の年齢も変わるので気持ちを切り替えるのに必死です。でも、撮影現場は最高に楽しくて刺激的です。楽屋でのコミュニケーションも活発だし、ベテランの制作スタッフさんのプロフェッショナルな仕事ぶりや気遣いには、感動を覚えるほど。初めてのドラマ出演がNHKで本当に良かったと思っています」

勢いよく俳優としての階段を駆け上がる竹下さんの毎日は、文字どおり飛びまわるほど忙しい。大阪での撮影が終わると神戸での舞台の稽古にラジオ収録、その合間を縫って深草キャンパス



所属する劇団Patchの公演「Patch stage vol.2 巖窟少年」で熟演

に通う。「卒業まで12単位残っているので真面目に通わないと(笑)。でも大学生活は演技のヒントが多いんですよ。マスコミ論の授業ではよく学生同士がディスカッションするのですが、僕とは異なる考え方や価値観を持った人がいるんだな、ということがよくわかってとても面白いです。いろんな感じ方を知ることは、いろんな生き方を演じるのに役立つだろうし、そういう視点で授業中も人間観察をしています」

すでに卒業後は俳優として生きていく覚悟を決めているが、芸能界入りするまでは、空手一筋。高校時代は全国大会に出場するほどの実力の持ち主だったことから、将来は空手師範になろうと思っていたそう。しかし、幼い頃から大好きな仮面ライダーへの憧れを捨てきれず、高校卒業と同時にダメ元で受けた劇団Patchのオーディションに合格。演技の経験もなく、初めは「なんだか難しそう」と敬遠していた舞台演劇だったが、主役に抜擢された初舞台に体当たりで臨んだところ、役者が本気でぶつかり合う舞台ならではのライブ感に取り憑かれた。思い立ったらすぐ行動、そしてやるならトコトンやる。そんな素直な情熱が竹下さんの魅力だ。いまでは演じるのが楽しくて仕方ないという。

NHKの朝ドラは、脚本の執筆と撮影が並行しておこなわれる。だからこそ、存在感をアピールしたいと竹下さんは意気込む。「脚本家がオンエアを見て“弥七いいな、もうちょっと登場させたいな”と思ってくれたら、出番が増えるかもしれないでしょ(笑)。見てくださった方が朝一番に元気が出る、そんなドラマになるよう一言一言に気持ちを込めてがんばります！」これから毎朝、元気いっぱいの竹下さんに出会える。物語の行方もさることながら、弥七の成長ぶりも楽しみにしたい。



竹下 健人さん

劇団 Patch <http://www.west-patch.com> twitter: @TKST\_KNT  
次回公演 「Patch stage vol.7 幽悲伝」

# 04 | People, Unlimited

ネパールに  
浄土真宗を広めたい  
大地震からの復興をめざし  
決意新たに

ギシン・ウマ・ラマさん  
文学部4年生

留学生ギシン・ウマ・ラマさんは、ネパール初の女性真宗僧侶だ。首都カトマンズにある本願寺の職員として働いていた彼女は、講話を聞いたことをきっかけに浄土真宗の教えに興味を持つ。「浄土真宗は、ネパールで信仰されている仏教とは全然違います。その自由で平等な思想は、ネパールの若者達にきっと受け入れられるはず」。いつかネパールに浄土真宗を学ぶ教育機関をつくることを夢見て、初めて彼女が日本を訪れたのは2006年。京都の中央仏教学院から、龍谷大学に編入。那須英勝教授の指導のもと、真宗学科での学びは2015年には2年目を迎えた。ネパールでは生まれた時から誰も宗教を持つ。しかしそれは個人的な信仰というよりは、文化的、習慣的なものであるようだ。生活習慣としての仏教を身近に感じながら育ったギシンさんは、浄土真宗のどのような部分に惹かれたのだろうか。

「ネパールでは、僧侶はすごく位が高く遠い存在です。結婚もできないし、一般人とは違う生活をおこない近づくことも許されません。一方、浄土真宗はお坊さんと一般の人が平等で、参拝の人も僧侶と一緒にお経を読みます。それはネパールの仏教ではあり得ないこと。私はそんな浄土真宗の平等さにとても興味を持ちました。厳しい戒律があるネパールでは、わかっているにもかかわらず失敗してし

まったりして、戒律の先に行くのが難しい。自由で実践的な浄土真宗の教えは、ネパールの若者にもきっと受け入れられるはず。私は、これから母国で浄土真宗が広まる可能性は高いと考えています」

しかし、日本で勉学に励むギシンさんを震撼させる出来事が起きる。今年4月のネパール大地震だ。8,800人以上の犠牲者、60万棟の家屋倒壊、280万人の被災者がでた(※1)。ギシンさんの生まれ育ったバクタブル地区は世界遺産としても知られ、古い寺院が建ち並ぶ街はことさら被害が大きかった。地震を知った直後に実家に電話をかけ、家族の無事は確認できた。しかしいてもたってもいられず、2週間後に本願寺職員とともに帰国した。

「なにもない。まるでネパール全体がなくなってしまったよう。その驚きと悲しみは表現できません」。親しんだ町並みは消え、異世界を見るかのようなだった。人々の心にも救いが必要だと感じた。彼女は断腸の思いで日本に戻った。「私がネパールではなく、日本にいるからこそできる支援があるはず」

地震直後から彼女はゼミの指導教員や学生有志、本学のボランティア・NPO活動センター、宗教部などと協力して募金活動をはじめ、これまでに約85万円もの寄付金を集めた。6月15日のお逮夜法要では、本学の顕真館で、教職員・学生・市民に対し「ネパール



大地震『いま私たちにできること』という講演もおこなった。また現地の状況を聞きたいという真宗寺院の声に応え、全国を訪れた。8月には、集まった寄付金をカマズ本願寺に届けるため、大学の友人達と再度ネパールに戻った。今立て直すべきは教育であるとの想いから、現地の小学校を訪れ、支援をおこなった。同行の那須ゼミを中心としたメンバーは、映像撮影やインタビューをおこない、帰国後に報告会も。

「壊れてしまったということは、そこからまた新しく強くなれるということ。なんとかこれまで以上に発展できたらと思っています。龍谷大学にいたことで多くの方々の協力を得ることができたし、学生達が動いてくれる姿にも感動しました。どこかでまた災害が起きたら私もできる限りのことをしたいと思います」

今後は大学院への進学をめざす。「大学院では親鸞聖人の説かれた他力本願の思想についてさらに深く研究したいです。母国の仏教は、自分で修行をして功德を積み悟りを開けるという自力の思想が主流です。でも良いことをすれば良いことだけが返ってくるわけではない。良いこともあれば悪いこともある、それをすべて受け止めながら生きていかれた親鸞聖人の教えに、私はとても納得するのです。ネパール人にとって他力本願の思想は斬新な

考え方。全く新しい価値観を国に持ち帰ることが私の役目です」

ネパールに学校をつくることができれば、『龍谷』という名前をつけたいという。ギシンさんを含め、まだネパール国内に浄土真宗の僧侶は7名しかいない。それが新しい教えを広めるとは、なんとも壮大なプロジェクトだが、まっすぐ未来を見つめ語るギシンさんの姿を見ていると、遠い夢ではないような気がしてくるから不思議だ。

「いつかネパールでも、子ども達が手を合わせて日本語でお念仏を唱えている光景が見られるかもしれませんね」

そう言ってギシンさんは微笑んだ。

※1 国連人道問題調整事務所(OCHA)レポートより(2015年8月10日時点)



ギシン・ウマ・ラマさん

# 04 | People, Unlimited

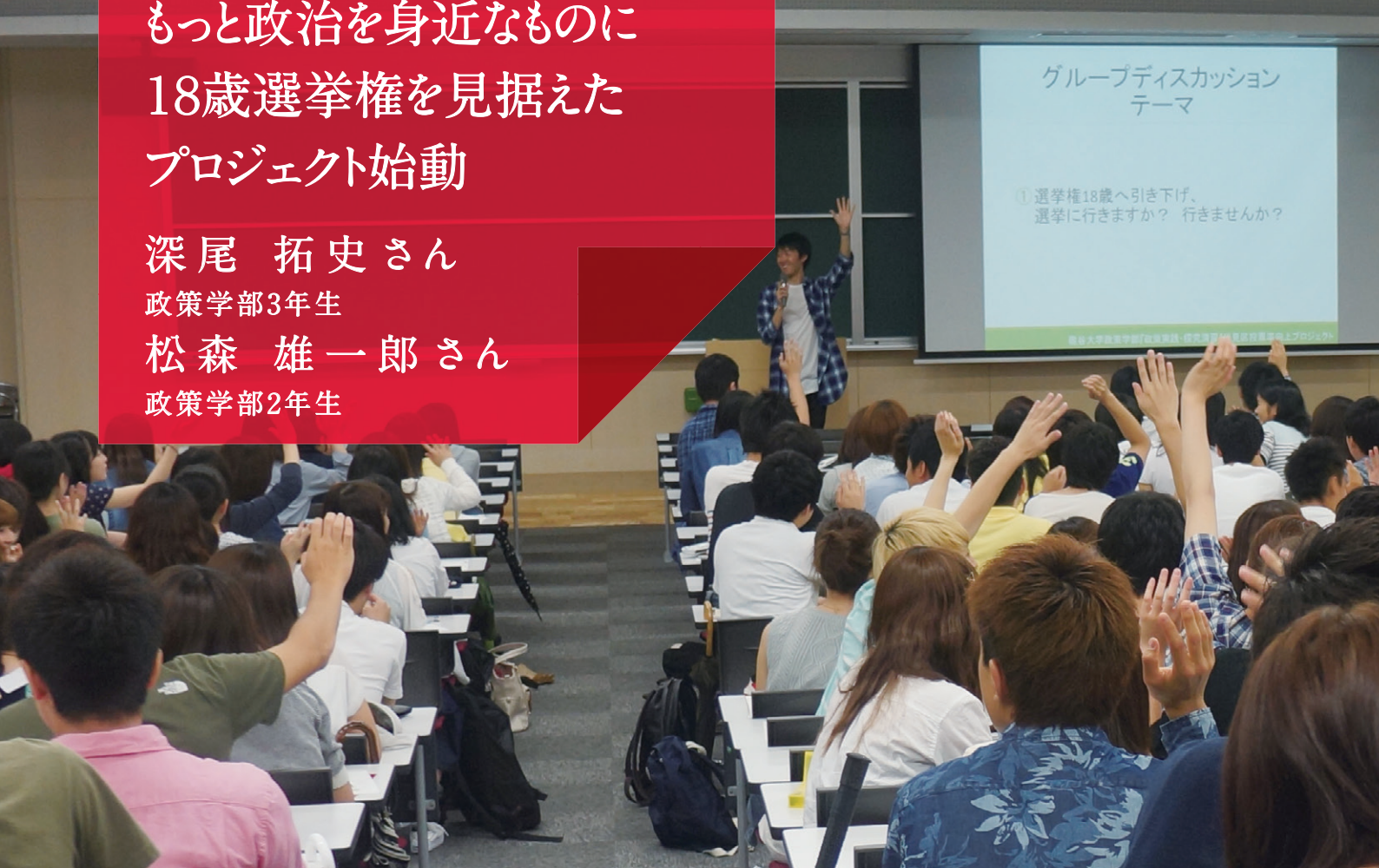
## もっと政治を身近なものに 18歳選挙権を見据えた プロジェクト始動

深尾 拓史さん

政策学部3年生

松森 雄一郎さん

政策学部2年生



今年6月に選挙年齢を18歳以上に引き下げる改正公職選挙法が可決され、新たに18、19歳の約240万人が来年夏の参院選から有権者になる。大学1年生から選挙権を持つことになるこの機会を活かして若者の政治への関心を高めたいと、京都府内では様々な大学の学生が積極的に取り組みをスタートしている。本学政策学部でも昨年よりPBL科目(課題解決型学習)の一環として「伏見区・若者の政治参加と投票率向上プロジェクト」(担当政策学部石田徹教授)が始動。学生への意識調査や1年生を対象にした講義、小学校へ出向いての模擬選挙などの活動をおこなった。中心となってプロジェクトを進める深尾さん、松森さんにお話を伺った。

「若者の投票率が低下しているという社会現象に興味があって、このプロジェクトに参加しました。私の家族はいつも選挙に行きますし、政治の話もよくします。ですから、私も選挙に行くのは当たり前だと思っていたのですが、周りの友達には関心がない人も多いことに驚きました(深尾さん)。「昨年初めて衆院選に行ってみて政治に興味を持ちました。大学では友達と政治について話すこともありますが、アルバイト先では選挙に関心がない人もいま

す。そんな状況を見て、意識を変えられたらと活動に参加しました(松森さん)」。昨秋、政策学部の学生400人にアンケート調査を実施し、政治や議員への意識を聞いたところ、選挙権を持つ学生のうち「投票に行ったことのある」学生は全体のわずか26%。また、「地方議員の仕事を知っている」と答えたのは24%、「地方議員を身近に感じる」は13%にとどまった。政策学部で学ぶ学生の約4分の3が投票をしたことがないのだから、他学部も含めて調査するとどんな結果が出るのだろうか。事実、若者の政治離れは深刻なようだ。

深尾さんらはアンケート結果を踏まえ、今年1月には京都市議4名を招いてワークショップを実施。学部を超えて集まった20名の学生と議員が「どうしたら若者に政治への関心を向けてもらえるか」について意見を交換した。「政治に携わる人と直接話したのは初めてでしたが、実際お話ししてみると案外身近な存在なんだなと感じました。参加者からも議員と話せて良かったという感想が多く、接点を持つことで関心が高まることを実感できました。また議員からも学生と話すのは貴重な機会、ぜひまた実施してほしいとのお声を頂きました(深尾さん)」





今年6月には、これまでの活動の総括として深草キャンパスにて講義を企画。政策学部の科目『政策学入門(政治学)』を受講する1年生約260名を前にして、選挙権年齢引き下げの経緯の説明や、今年1月に国会議員におこなったインタビューの紹介、伏見区池田小学校で6年生を対象におこなった模擬投票の様子などを報告した。「どのようにすれば政治を身近なものと考えてもらえるのか」、「どんな環境なら投票に行くか」などのテーマでディスカッションも開催。1年生達は「政治が身近に感じられない」「選挙年齢引き下げにあたって、自分達の判断能力や情報収集能力はまだ充分でないと思う」など、政治に対して不安な気持ちを述べながらも、議論は活発に盛り上がった。

今後プロジェクトが取り組みを進めたいとするのは、深草キャンパス内への期日前投票所の設置だ。2013年参院選の際に、松山市が全国で初めて大学に期日前投票所を設け、20代前半の投票率が上昇した例を参考に、伏見区選挙管理委員会などに京都初となる大学設置を求めている。「大学内で投票ができれば意識も高まるし、一般の方も利用できるので大学と地域住民の接点づくりにもなるのではと期待しています(深尾さん)」。「議員を招い

てのワークショップや1年生への講義は今後も続けていきたいです。そのためには僕らももっと勉強しないと(松森さん)」

よりよい政治の実現には、ただ年齢を引き下げるだけではなく、早期からの政治教育の充実や、より投票しやすくするための選挙制度の見直しが不可欠である。国を揺るがす法案が採決され歴史が大きく変わりつつあるいま、もはや政治の傍観者では未来を切り拓くことはできない。政治の知識は、社会で生きる基礎体力。このプロジェクトを通して一人でも多くの学生が政治に関心を持ち、これからは生き抜く逞しさを身につけることを期待したい。



深尾 拓史さん 松森 雄一郎さん

# 05 | Education, Unlimited

## 自然環境と 人間のなりわいを 見つめる

農学部 食料農業システム学科  
中川 千草 講師

### 地域資源と人々のなりわいを紐解く

「塩を焼く人々」というタイトルの可愛らしいフォトブックが生まれた。アフリカ・ギニアの鮮やかな景色と人々のなりわいが、自然体の写真で切り取られ、それとともに絵本のように易しい言葉で説明が綴られている。これは本学農学部の中川千草講師が、自身のフィールドワークの素材を活用して製作したものである。きっかけは、昨年からはまった西アフリカでのエボラ出血熱の流行だった。2014年3月、中川講師がギニアでのフィールドワークから帰国した直後、エボラ熱の発生が発表された。それ以後、渡航はできていない。もどかしい時間を過ごすなかで、このフォトブックを有料で販売し、その収益を現地へ送ることを決めた。ただし、支援や寄付というよりもむしろ、友人や知人、お世話になった人の生活に役に立つのなら、という感覚で始めたことだという。

中川講師の専門は社会学。地域コミュニティをつなぐ資源や自然環境、そこでの人々の暮らしぶりとの関係性を、フィールドワークを重ねて観察していく。主な舞台は日本やアフリカの沿岸部の農漁村。ギニア沿岸部では製塩業が盛んだという。

まず海水を土と枯れ草でろ過し、塩分濃度の高いかん水を作り、煮沸式の場合は火を絶やさないように、沸騰させないように加減しながら、ひたすら薪をくべ、塩を焼き上げる。マングローブ林の保全のため、海外NGOによって近年導入された天日式の場合は、ビニールシートを利用する。煮沸式に比べ、作業は多少楽になるが、一日仕事であることには変わらない。また、一人ですべての作業をこなすことは難しいため、4~5人のグループ単位で従事するのが慣例だという。製塩のシーズンは1月から4月頃までの乾季のみ。期間中は、作業場所の近くに移り住み、共同生活を送る。家族を支える収入を得るために、ローカルな方法

に固執することなく、新しい方法や知識に柔軟に対応しながら、塩を作り続けている。

エボラ熱の拡大の背景として、しばしば科学的根拠に基づいた対策とローカルな習慣のぶつかりが指摘されるが、事態はそれ以上に複雑だという。なにより、そうこうしているあいだにも、彼らには優先すべき日常もある。住民達はエボラ熱の恐れが配された状況を日常として生き始めているのだという。

「エボラ熱とニュースで騒がれても、どんな人達が困っているのかまではイメージしづらいかもしれません。日本での報道には偏りがあります。情報の裏側に何があるのかは、エボラ熱が発生する前に現地を訪れ、フィールドワークをおこなっていたからこそわかることもあります。それを発信するのが、自分にできることの一つだと思い、このフォトブックを作りました。難しい学術的な言葉を連ねるよりも、今回は絵本感覚で、例えば家族や友人と見てくれたらいいなど。全てを伝えられないにしても、『ああ、こんなふう暮らしている人がいるんだ』ということが、頭の片隅に残って、次に別の情報に触れたときのフックになれば」

学生に講義する際も、アンテナを広げて、今までに知っていることと新しく学ぶことをつなげていく楽しさを伝えたい、と中川講師は語る。

農や食を考えるときに、それを生み出す側の人達がどのような暮らしを送っているのかということは、欠かせない視点だ。中川講師が担当していくソーシャルキャピタル(社会関係資本)論や地域マネジメント論といった分野は、そういった意味で、農学部での学びを重厚にする。地域の資源…例えば沿岸部であれば、海や浜辺そのもの、そこから得られる水産物が人々のなりわいを成り立たせ、文化を築き、地域内をつないでいる。それらをどう活かせば、社会はよりよく回っていくのかを考えていく。





## 人間は、環境と向き合わずにはいられない

中川講師は三重県鳥羽市の海辺で生まれ育った。通訳や国際協力の仕事に興味があって進学した外国語大学では、大学でしか学べないマイナー言語を学ぼうと、アフリカの言語を専攻してみた。さらに「身近なことじゃないと深く考えられないよ」という恩師の言葉を受けて、自分にとって身近だった海辺のことを「開発・環境」という視点から研究していくことにした。そこで、三重県南伊勢町の沿岸部の集落でのフィールドワークを開始した。

そこにはりついてフィールドワークを続けるなか、博士論文に行き詰まりを感じていた2008年、ようやく調査費を得ることができ、リフレッシュも兼ねて念願のアフリカ・ギニアでのフィールドワークを叶えた。以後、日本とアフリカそれぞれの沿岸部の農村・漁村で、地域資源の利用やコミュニティのつくり方をテーマにした研究をおこなっている。

博士号取得後は、総合地球環境学研究所のプロジェクト研究員として、日本各地、世界各地を飛び回ってきた。北海道の鶴

居村でのタンチョウヅルの保護と農作物への影響、広島のお芸北町の里山再生、石垣島の珊瑚礁保全、マラウイでの持続可能な漁や流通システム。日本でも他国でも、そこで暮らす人々が、今日生きていくために、子どもを育てていくために、自然と付き合っている姿を目にしてきたという。

「学生には、自然を相手にして暮らすことの厳しさと豊かさを伝えていきたいですね。例えば私が通っている地域の一つに、有機農法で全国的にも有名な宮崎県の綾町というところがありますが、今年は雨がとて多くて、収穫率が50%ぐらいになっている農家さんもあります。農家はたいてい家族経営なので、家族全員の収入が半分になってしまうわけです。かといって、自分達の畑は目の前にあるので、それを放って別のところに働きに行くことはできません。6月は日中晴れが続いた日が1日しかなかったそうです。一瞬の晴れ間が、自分達の暮らしを左右する大切な作業時間となります。そういうことを知り、食や農に関連する進路に進むときに、生産者側のなりわいに対して深い視野で思考できる力をつける。そういう授業を心がけています。秋



フィールドワーク中に森の中を移動（ギニア Bossou にて）

からはじまる『食の循環実習』では、こういう側面を体験できると思います」

### 社会を立体的に捉える視点を育む

環境保全が叫ばれている現状に、ある意味慣れつつあるとも思える現代人。北極のシロクマが絶滅の危機に瀕していること、南国のマングローブ林が減少していること、どこかの地域で災害が起こること。その影響をダイレクトに受ける人々とは、経済とは…。自分から一見遠く離れている事象ほど、自分とのつながりを考えてみてほしい、と中川講師は語る。

今のあたりまえの環境を問い直してみる社会学で、 $A+B=C$ だけに終わらない現象を見つめ、知識のアンテナを広げていくことは、日本の農学分野のみならず、グローバルな課題にアクセスしていくきっかけになるのかもしれない。中川講師の講義は、学生達にその扉を叩かせるものとなる。



中川千草：なかがわちぐさ  
1977年三重県生まれ。関西学院大学社会学研究科博士課程修了、社会学博士。総合地球環境学研究所プロジェクト研究員を経て本学へ。専門は地域資源のあり方の分析を通じて、食料確保や経済的安定という生活の維持・向上と、地域資源そのものの保全の多様性について考えること。環境社会学や環境民俗学の見地から、日本や海外の半農半漁村社会を対象としたフィールドワークをおこなってきた。

# 05 | Education, Unlimited

## 発掘現場から モノや人との対話力を育てる

文学部 歴史学科 日本史学専攻  
國下 多美樹 教授

(文学部歴史学科文化遺産学専攻所属予定)  
※2016年4月開設

### 自分の目で丁寧に観察することで、ものを見る目を磨く

様々な計測器具を使って、年季の入った重厚な瓦を測っては方眼紙にスケッチしているのは、考古学実習を受講する学生達。曲がっていて手も差し込めない内側の部分はどう測るか、ある角度でキープしてスケッチするにはどうするか、試行錯誤で取り組んでいる。「この角って本当にこんなにまっすぐだった？よく見て」「ここにうっすらヒビのようなものも描いてるね。継ぎ目だね。見逃さなかったね」と声をかけながら見守るのは國下多美樹教授。この日は西本願寺の大屋根の改修で出た瓦を使って、考古学現場では欠かせない実測の訓練をおこなっていた。

「実測は、形の輪郭を測っていくということと、拓本を取る事です。見たものを表現する訓練になります。綺麗に描けとは言いません。よく観察をして描こうと言っています。例えば瓦なら、模様や製作技法を観察する。パーツをどのように接合しているのかや、表面の仕上げ方などは、職人の技術系統や製作年代を示す。茶碗なら、口の部分に職人の癖が出る。観察のポイントがわかると、ぼんやりしていた絵も変わってきます。興味が持てるようになり、すると知識も頭に入ってくるようになり、ものを見る目が肥えてくる。机上の書籍などで見ている、実物を見ると全然違うということは意外に多いんです。遺物そのものと対峙して観察して記録に残し、考える、ということを大事にしたいと思いますね。考古学は地に足がついた学問であるべきなので、足下をすくわれないように、一步一步踏みしめていく必要があります」

2016年度から文学部歴史学科に新設される文化遺産学専攻では、「文化遺産」のキーワードに目的意識を持って集まってくる学生達に対して、これまでの文化財コースでは補えなかった、専門知識の体系的な習得の機会を提供する。國下教授は

フィールドワークを中心に、遺跡や遺物に直接関わって、地域に刻まれた歴史を読み解く、そのノウハウを伝えていく。

### 長岡京遺跡の発掘現場での30年

教授自身の考古学との出会いは、中学生の頃。テレビで世界の遺跡などを取り上げた番組を観て以来、考古学へのアンテナが立ってしまった。大学では長岡京の調査に参加し、それが結果的には、考古学に人生をかけていく契機となった。

「とはいえ、学生時代は発掘に出ても、自分で何をやっているのかよくわかっていませんでした。僕らの頃は大学で系統的に考古学を教えてもらえる時代ではなく、発掘の現場でいろいろなことを学んでいったという感じです。ところが、大学院修士1回生の22歳のときに、調査員として発掘現場をまかされ、そこで銅鐸鑄型が出土したのです。それが今も自分のテーマとする青銅器研究の出発点となったわけですが、そのときようやく、少し考古学のことがわかったような気がしましたね」

その後、長岡京跡がある向日市の埋蔵文化財センターで、資料館や財団組織の立ち上げ、公益財団への移行など、いろいろな事務仕事と並行しながら、2012年まで30年近くずっと、長岡京の都の調査研究の現場にいた。ちょうど公共施設の立て替え、新築の時期で作業が立て込み忙しい時代だった。仲間達と朝から晩まで発掘し、夜は報告書をまとめ、合間に論文を書いていた。そんな現場経験を経た後、本学へ。

「実践的な知識とコミュニケーション能力を持ち合わせた、即戦力となる人材の育成が急がれていることも現場で実感していましたので、今まで積み重ねてきたことを活かし、大学教育のなかで、考古学の後進を育てていきたいと思いました」





### その地域にどれだけ真剣に寄り添えるか

國下教授の考古学実習では、地域に入り込んで学生と一緒に遺跡を資料化していくことを重視する。考古学があまり介入していない地域を探して、自治体の担当課のドアを叩くところからはじめ、遺跡周辺の地域の人々との関係づくりをし、調査をさせてもらう。2012年は前任の岡崎先生の業績を引き継ぎ、滋賀県比叡山山麓の群集墳の測量をおこなった。そして2013年には、京都市右京区の京北をフィールドに、その歴史の解明をやりたいと旗を揚げた。まずは5世紀初頭の有力な首長の墓がある周山古墳群を測量。昨年度は、街道近くの謎の多い中世の城跡「上中城」の測量に着手。夏期に学生とともに泊まり込んで計測し、それまでにあったものよりも正確な測量図を仕上げることができた。同時に課題も出てきた。年代、使い方、どんな建物が存在していたのかなど。今年は京都市の文化財保護課と調整をし、いよいよ発掘に着手することになった。

「北面の武士をつとめた京北の有力な武士が城館を築いて

いたとされています。堀や土塁を中心とした、敵の侵入を防ぐための城ですね。京都には中世の城はたくさんありますが、そのなかでもとびきり古い。京都市の指定史跡になっていて、公園として整備されていますが、わからないことが多い。まず小さな発掘からでも着手して、歴史を具体化できる素材を提供していきたいと思っています。これから建物の痕跡などが見つかるといいですね。積み重ねていけば、地域での説明会の開催など、地元の方と接触を持つ機会もあるでしょう。学生達には地域の方々とのコミュニケーションの大切さをぜひ体感してほしい」

「10年、20年という単位で継続的にやってこそ、京北の歴史を解明していくことにつながる」と、國下教授は語る。その現場に立ち、汗を流す学生達が得ていくものはきっと大きい。

### 次期担い手の育成が急がれる、文化財保護行政

1960年代以降の高度経済成長期には、全国規模の開発に対しての文化財調査のために、7~8000人の業界、といわれる





京都市右京区京北町「上中城」の発掘作業で汗を流して学ぶ

ほど多くの考古学従事者がいた。ところがそのバブル期も終わり、現在は4000人ほどに。さらにそこにも退職の時期が来ているという。後継者の育成が急がれ、文化庁も対策に追われている。大学と行政の連携もすすめられ、学生の文化財保護行政の仕事への意識を高めるため「埋蔵文化財保護行政説明会」が今年は明治大学で開かれ、来年は奈良大学で予定されている。今こそ大学で、これからの文化遺産保護活用に携わる人材を送り込めるような土壌をつくっていく必要がある、と國下教授。

「学生はいても、発掘現場に出たり、文化財資料を見て1~2時間でも話せる即戦力がいない。さらにこれからは、地域の人達と一緒にやるというスタンスで積極的に関係づくりができる人でないと。だからフィールドワークを重視しているんです」

また、文化遺産の価値を地域で活かしていくという、都市計画やまちづくりの視点も重要になってきている。歴史だけではなく、地域の様々な魅力を見出し、組み合わせ、まちの個性をつくり出せるような人材が求められる。本学の考古学の取り組み、新設される文化遺産学専攻は、今後の文化財保護政策に対しても大きな役割を担っていきそうだ。



國下 多美樹くにした たみき  
1958年広島県生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了、文学博士。向日市埋蔵文化財センターにおいて長岡京跡の発掘・調査研究の現場に約25年携わった後、2012年より本学文学部歴史学科教授。日本の弥生土器、青銅器、都城の研究を専門とする。日常は、京都を散策し路地裏の歴史を読み取ること、弥生時代の資料の洗練さに感動をおぼえる毎日を送っている。

# 05 | Education, Unlimited

## 適切な人のつながりが、 これからの地域福祉を 変えていく

社会学部 地域福祉学科<sup>※</sup>

筒井 のり子 教授

※2016年4月開設の現代福祉学科所属予定

### 「ボランティアコーディネーション力」が地域福祉を変える

社会構造の変化に伴って、地域福祉におけるボランティアのあり方も大きく変わっている。

社会学部地域福祉学科の筒井のり子教授は、30年以上にわたって日本の地域福祉やボランティア活動のあり方を現場で見つめてきた。とくに、複雑化する社会問題を解決する糸口として提唱し続けてきた「ボランティアコーディネーション」という概念は、市民の自発的な社会参加と持続的な活動を支える役割として、今あらためてその重要性が目まぐるしく注目されている。

筒井教授が地域福祉に関わりを持つようになったのは大学生のとき。社会福祉を学びながら通った現場実習や、大学院在籍時にソーシャルワーカーとして働いた経験を通じて、従来の福祉のあり方には不十分な点がいくつもあることに気づいたのだという。

「まだ介護保険制度もない頃ですから、社会的に弱い立場の人を支えるためには地域のボランティアの力が頼りでした。しかし、人の暮らしにはいくつもの要素があって、特定分野の専門職だけでは抱えきれない問題があるんですね。例えば、在宅生活をしている難病患者の支えは医療従事者だけでは足りない。福祉や医療、教育など様々な分野の専門家と、近隣住民やボランティア達が協力し合うことで、その方の人生を豊かにする支えができるのではないか、と考えていました」

1980年代当時は、介護問題について在宅ケアや地域福祉などの議論が始まった頃。筒井教授も、重度の障がいや病気を抱えている人でも住み慣れた自宅で暮らす方法はないかと模索する日々だった。そこで筒井教授が必要だと考えたのが、状況を把握して適切な場所に、適切な人材を充てるボランティアコー

ディネーターの存在だ。

「人と人をつなげ、大きな視点で地域の問題解決に向き合うことができる存在が必要でした。『社会に対して貢献したい』と考える人が多くいても、バラバラに活動しては効果が出ません。当時、すでに私自身がボランティアコーディネーターとして活動をしていましたが一人では限界がありました。『今、私がしている役割は将来の社会において必ず重要になるだろう』という確信がありましたから、なんとかこの役割を普及させたいと考えたんです」

障がい児の余暇活動を支援する団体と画家をコーディネーションすることで、より魅力的なボランティア活動が生まれた事例がある。ボランティアコーディネーターの存在なしに、この両者が出会い、互いの特性を活かした取り組みを生み出すことは難しかっただろう。

筒井教授は、志を同じくする仲間と勉強会を重ねながら、ボランティアコーディネーターの育成を図った。

2001年には、特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会を設立。多様な社会問題解決のために、より幅広い市民参画で向かい合うことを目的として、高いボランティアコーディネーション能力を備えた人材育成に取り組み始めた。そして、2009年からは「ボランティアコーディネーション力検定」を実施。ボランティアコーディネーターの役割を明確に定義し、その知識とセンスを持つ人のすそ野を広げる枠組みをつくりあげた。

「受験者数は年々増加し、入門編ともいえる3級合格者は累計2,583人(2015年6月時点)になりました。受験生はボランティア団体からばかりではなく、行政の市民協働担当者やNPOの職員、学校教員、企業のCSR担当者などとても幅広いんです。今後、様々な業界の問題解決において、『ボランティアコーディネーション力』が発揮されることを期待しています」





## 複合的な視点を持った人材育成をめざす

2016年度には、現在の地域福祉学科と臨床福祉学科を改組し、新たに現代福祉学科として生まれ変わる。家庭や生活環境の変化によって、複雑化する現代社会の福祉問題に対応するには、より総合的な支援力が求められているためだ。

「介護保険制度の誕生などによって日本の福祉は大きく前進した一方で、30年前にはほとんど語られることがなかった問題が顕在化しています。生活困窮者、孤立死、子どもや高齢者への虐待問題、引きこもり……。これらの問題は複雑に絡み合っていて、同じ家庭で複数の問題を抱えていることもめずらしくはありません。根本的な問題解決をめざすには、多様な人々（専門職やボランティアなど）がそれぞれの力を発揮して支えることが大切。現代福祉学科では『現代社会が抱える福祉問題』をテーマに、ボランティアコーディネーションも含めた幅広い領域で問題に向き合う人材育成をめざします」

現代福祉学科では、卒業後の進路を見据えて「ソーシャル

ワーク」「社会貢献」「福祉教育」の3コースを履修モデルとして設けているが、各コース科目を横断的に学ぶことができ、複合的な視点から福祉を考える力を身につけることができる。

「特別支援学校の教員がソーシャルワーカーの知識をあわせ持っていれば、より重層的な教育が可能になります。専門領域だけではなく、問題解決の手法を総合的に学ぶことが大切なのです」

インターネットの普及により、ボランティア団体運営のあり方は大きく変わった。SNSなどを活用した情報発信やファンドレイジングのノウハウによる財源確保などが一般化し、持続的な問題解決をおこなう方法としてソーシャルビジネスの活性化も著しくなった。

「情報が共有されやすい社会になったからこそ、今後はますます社会性を帯びた福祉活動が求められます。現代福祉学科では、これまで以上に『つながり』を意識し、それをうみ出していける人材を育てることで、多様化した現代社会の福祉問題解決の第一歩につなげます」



福島県災害ボランティアセンターで「災害ボランティアセンター通信」の編集作業中(2011年9月)

2007年度から社会学部で取り組んでいる「大津エンパワメント」では、瀬田キャンパスがある大津市を舞台に地域住民と学生がともに地域づくりを考え、地域の様々な課題に向き合っている。

「地域活性化をテーマに街へと出ていった学生達が持ち帰ってくる課題は十人十色。社会学部の全学科が参加するプログラムなので当然と言えば当然なのですが、学生ごとに視点が違うんですよ。『商店街にベンチが無い』『子どもの通学路がせまくて危険』『地域の情報共有が必要だな』と、それぞれ違う課題を持ち帰って整理し、それに優先順位を付け、様々な関係者との協働のもとで行動に移していきます。これだって一種のコーディネーション力なんですよ。立場や世代を超えた人達と、膝と膝とを突き合わせて同じ課題に取り組むなんて、実社会とまったく同じ取り組み。学生達にとってはかけがえのない学びの機会です」

筒井教授が30年前に思い描いた「ボランティアコーディネーション力を活用した理想の地域福祉」は、現代の社会福祉においては必要欠くべからざるものとなった。現代福祉学科から羽ばたく人材が、日本の福祉のあり方を変える日もそう遠くはないだろう。



筒井のり子・ついのりこ  
 1958年奈良県生まれ。関西学院大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士課程前期課程修了。専門分野は地域福祉、ボランティア・市民活動。市民活動団体で事務局をつとめ、地域福祉の現場でボランティアコーディネーターとして活動。認定NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会代表理事。大津市第2次地域福祉計画策定委員長など。

# 06 | World, Unlimited

英語は目的ではなく、  
夢を実現するための手段

国際学部

グローバルスタディーズ学科





## より実践的な英語教育をめざして

今春、開設された国際学部グローバルスタディーズ学科では、国際舞台でリーダーとして活躍できる人材育成をめざして、実践的な英語教育がおこなわれている。

1クラスあたり15名程度の少人数制を主体とした英語の授業は、スピーキングやリスニングといった基礎的な学習のみならず、論理的思考やグローバルな知識など、英会話コミュニケーションの幅を広げるためのものとなっている。

1年次には英語でおこなう授業が週8回以上あり、翌年度に控えた海外提携校への留学(必修)に向けた英語力を養う。また、2年次以降も約8割の講義が英語または英語と日本語併用でおこなわれ、留学から帰国後も英語に日常的にふれる環境が用意されている。

3年次からは、卒業後の国際的な活動を想定して、「グローバルゼーション(グローバルな視点からの知識と思考力)」「コミュニケーション(議論ができる英語力)」「エシックス(世界で通用する倫理観)」といった三つの専門学問領域を学んでいく。

専任教員のおよそ6割が海外の大学で博士号を取得していることも、グローバルスタディーズ学科の特色の一つ。日本以外のバックグラウンドを持つ教員陣が、物事を複合的に捉える視点を伝える。

## 心をつかむプレゼンテーション

言語学を専門とするジュリアン・ピゴット講師による「Writing」の授業では、学生がそれぞれの関心事に沿って英語でエッセイを執筆する。また、エッセイの内容をほかの学生の前でプレゼンテーションすることで、英語で自身の意見を伝え、他者と論理的に議論する能力を鍛える。

1年生の村田健斗さんが発表したテーマは「戦争について」。歴史的経緯だけを論じるのではなく、現在の国際情勢などについても自身の見解を交えて発表した。授業中の発言は全て英語だ。プレゼンテーションが終われば、先生やほかの学生から次々と質問があがり、村田さんの回答がさらに議論を深めていく。

村田さんは、この授業について「同じ英語でも文章と会話では言葉選びに工夫が必要。その違いを知るだけでも大きな経験です」と話す。

「エッセイは、関心があるテーマを見つけてその内容を掘り下げ、文章として結論へと導くことが大切。一方で、プレゼンテーションでは自分が想定していなかったような質問があったり、議論が展開するなかでテーマから離れていくこともあり、発想力やコミュニケーション能力が求められます。同じクラスの仲間の発表を参考にして、話し方や声の大きさ、身振り手振りなども工夫して『心をつかむプレゼン』をめざしています」

この日、ほかの学生が発表したテーマは「LGBT(性的少数者)」「ジェネリック医薬品」など、いずれも簡単に結論を出すことができない社会問題だ。難解なテーマについて議論をすることは、異なる立場や視点を持つ人の意見を受け入れることでもある。

「自分の考えを英語でうまく話せずにもどかしい思いをすることも多々あります。同じ大学、同じ学科で学ぶ仲間でも意見が違うのだから海外ではなおさら。今後はさらに自信を持って自分の意見を伝えられる能力を伸ばしたいですね」



## 世界で通用するコミュニケーション能力を身につけたい

村田さんがグローバルスタディーズ学科を選んだ大きな理由は「世界で通用するコミュニケーション能力を身につけたいと思ったから」。教科書英語ではなく、海外で働くことができる実践的な能力を求めているのだ。

「子どもの頃から『将来はF1に関わる仕事に就きたい』と夢見てきました。様々な国や地域からスタッフが集まり、世界中を転戦するF1の共通語はもちろん英語。読み書きができるだけでは不十分です。グローバルスタディーズ学科では、提携校への長期留学が必修となっていることも決め手でした。世界トップクラスの大学で学ぶ機会は大きなチャンスですから」

村田さんは英語を、夢を実現するための手段として捉えている。英会話そのものを学ぶことよりも、そのコミュニケーション能力を駆使してさらなる学びを得ようとしているのだ。

中学生の頃から意識的に英語学習に取り組み、高校生の頃には英語プレゼンテーションの経験もあったという村田さん。しか

し、入学してからは同級生達の意欲の高さに驚きの連続だったという。

「まるでネイティブのように英語が話せる人や、国際的な視野で社会を語ることができる人など、同級生には刺激を受けることばかりです。よく皆で図書館に集まっては互いに得意分野を教え合っています。同級生達は友人であり良きライバル。負けていられないですね」

現在は、来年に控えた留学に向けて英会話の学習に集中しているという村田さん。めざすは世界有数の名門校、カリフォルニア大学バークレー校だ。

「今、一番力を入れている授業は『Oral Communication』ですね。留学時には現地の学生とのコミュニケーションに困らないように準備しておきたいですし、留学先の大学で履修する正規授業も存分に吸収したいですから。僕は海外生活の経験がほとんどないので、気後れしないように、1年生のうちに英会話の基礎的な部分は終えておきたいですね」

ある日の休み時間、村田さんが向かったのは和顔館1Fにある





ジュリアン・ピゴット講師による「Writing」の授業

「グローバルコモンズ」。グローバル教育推進センターによって運営されている、この施設のグローバルラウンジやマルチリンガルスタジオでは、授業外でも外国語にふれることができるよう、留学生達と話すためのスペースが用意されている。

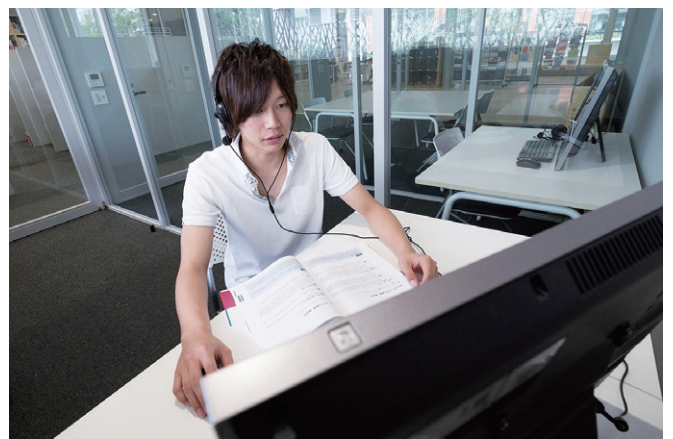
「授業時間以外はよくここに来ますね。勉強という感覚ではなく、普段の会話を通じて『活きた英語』に馴染んでいます。英会話が上達したかどうかはわかりませんが、少し社会的になったような気がします。自信がついてきたのかな？」

グローバルコモンズには、防音効果の高いスピーキングブースもあり、映像・音声教材を使用して発音の練習もできる。

グローバルスタディーズ学科では、教員がスーパーバイザーとなって授業以外の学習面をサポートする制度もある。また、先輩学生がメンターとなつての学習・生活全般のサポートもある。来年にはグローバルスタディーズ学科の2期生が入学し、村田さんは自身の留学と、後輩のサポートで今以上に多忙な日々を送ることだろう。

「留学を終えたら、企業でのインターンシップにも挑戦してみた

いんです。グローバルスタディーズ学科で学んできた能力が実社会でどれほど通用するのかを試してみたい。留学にインターンシップ、そして就職と一つずつ課題をクリアしていくことが夢の実現につながると信じています」



グローバルコモンズ内にある、防音効果の高いスピーキングブース

# 07 | Event Ryukoku Museum

## エキゾチックな出会い



龍谷ミュージアム 2015 年度秋季特別展

### 「アンコール・ワットへのみち ほとけたちと神々のほほえみ」

2015年10月10日(土)~12月20日(日)

主催 龍谷ミュージアム、日本経済新聞社、京都新聞

4つの顔に4つの手を持つ神秘的な石像は、創造を司るヒンドゥー教の最高神ブラフマー。精悍な姿に凛とした尊顔がこちらの心を見透かすかのようだ。ブラフマーは仏教では梵天にあたり、日本国内での彫刻表現で代表的なものは東寺の立体曼荼羅などにみられる。インド発祥のヒンドゥー教と仏教は源流を同じくしているため相互に深い関わりを持つ。

このブラフマーの石像はインドシナ半島カンボジアの10世紀頃のもの。世界遺産であるヒンドゥー教の巨大寺院「アンコール・ワット」が誕生する少し前だ。インドシナ半島はその名のとおり、陸路と海路両方からインドと中国の影響を強く受け、大乘仏教、上座仏教、ヒンドゥー教が時代によって複雑に交錯しながら信仰さ

れてきた。多様な文化が融合し、独自の様式が発展したインドシナ半島の造形美を、カンボジアを中心に広く紹介するのが、10月からの特別展だ。国内の個人コレクターらの協力を得て全国を巡回している。

9~15世紀にかけて強大な勢力を誇ったアンコール王朝は、アンコール・ワットに代表される豪壮華麗なヒンドゥー教、仏教の美術を各地に残している。「日本でこれまであまり取り上げられてこなかった東南アジアの彫刻、ということはまだファンが少ないということなのですが、ぜひこの機会に、カンボジア文化を見守ってきた神秘的な神々やほとけたちの姿を存分に味わっていただき、関心を持っていただけたらと思っています」と担当の岩井学芸員は語る。

福岡発の全国巡回展ではあるが、龍谷ミュージアムでの展示は独自の構成に。第1章では「アンコール彫像の変遷」と題してアンコール・ワット前までの時代を凝縮してその彫像様式の変遷をみていく。ヒンドゥーの神々を中心に構成されており、インドの影響を受けた艶かしい女神の腰つきや衣装など、写実的な美しさも堪能してほしい。



注目は第2章「神々とほとけたちの姿」。冒頭に紹介したブラフマーのように、ヒンドゥー教のおもな神々の姿を、それが日本仏教でどのような尊格とされ、どのように表されているか、照らし合わせながら鑑賞ができるという。破壊神シヴァは自在天、象の頭をもつガネーシャは歓喜天、幸運を司る女神のラクシュミーは吉祥天といったように。個性豊かな神々やほとけたちの姿から、ヒンドゥー教や仏教のそれぞれの世界観を楽しめそうだ。

第3章はヒンドゥー教の最高神のひとりヴィシュヌ像を中心にあらためて時代を追う「アンコール・ワットへのみち」。ヴィシュヌは繁栄・維持の神で彫像が比較的多く、造形の変遷をとらえやすい。

「東南アジアはヒンドゥー教や仏教だけでなくイスラームなども含め、様々な宗教が共存を続ける世界的にも注目の地域です。多様と許容の文化のなかでつくりだされた、平和的で温かな佇まいの神々と対峙したとき、それぞれの方が感じるものを素直に味わっていただきたい。本当は、事前知識は置いておき、直感的に作品を体験していただくのが一番おすすめです」

■秋季特別展「アンコール・ワットへのみち」展覧会情報

<開館時間> 10時～17時(入館は16時30分まで)

<休館日> 月曜日(祝日の場合は翌日)

<入館料> 一般1,200円(1,000円)、高・大学生800円(600円)、  
小・中学生400円(300円) ※( )内は前売り・団体料金

[関連イベント]

記念講演会・タイ仏教の法要・学芸員によるギャラリートークなど

※詳細は龍谷ミュージアムHPをご覧ください。

<http://museum.ryukoku.ac.jp/>



岩井 俊平 (龍谷ミュージアム学芸員)

# 08 | News & Topics

## 最新情報



### 相撲ガール川島、 全国女子相撲選抜大会で3位入賞

2015年6月、第1回全国女子相撲選抜ひめじ大会で、本学相撲部の川島睦貴選手(文学部2年生)が一般の部軽量級にて3位入賞した。川島選手は2014年の相撲部創部100周年の年に、本学初の女子選手として入部。昨年、関西女子相撲選手権では軽量級準優勝、無差別級3位という成績をおさめている。



### ユニバーシアード競技大会に出場 バレーボール手原選手、バドミントン下田選手

2015年7月3日～14日に韓国・光州にておこなわれた第28回ユニバーシアード競技大会に、男子バレーボール部の手原紳選手(経営学部4年生)と、女子バドミントン部の下田菜都美選手(経済学部3年生)が日本代表として出場した。大会本番では、下田選手はバドミントン混合団体に5位入賞、手原選手は男子バレーボールで6位入賞。



### 東アジア柔道選手権大会48kg級で 女子・濱田選手が優勝

2015年6月20日、21日に愛知県武道館でおこなわれた第8回東アジア柔道選手権大会48kg級で、濱田早萌選手(経営学部3年生)が優勝した。続いて6月27日、28日に日本武道館でおこなわれた第24回全日本女子柔道優勝大会では、本学が第3位に入賞。この大会で1年生の米澤夏帆選手(文学部1年生)は優秀選手賞を受賞した。



### 農学部実習農場で初めての田植えを実施

2015年5月、本学農学部で大津市牧農場において、初めての田植えを実施した。農学部では、「食の循環」をテーマにし、生産、加工、流通の流れを体験する「食の循環実習」を低年次の必修科目としている。この農場は、当該科目で使用する農場であり、9月より開始する授業に備えての実施。



### 経営学部学生らが オープンキャンパスでマルシェを実施

龍谷大学経営学部の学生有志が、2015年8月のオープンキャンパスで、「龍谷マルシェ」を開催した。学生達が関わってきた産官学連携事業の成果物である「京の水カフェ」や「日本酒プロジェクト」、「龍谷カレー」などを提供。また、これらのプロジェクトで実際に使用した装飾品やレジュメ、パネルなどを展示し、来場者へ活動内容を紹介した。



## 女子サッカーW杯決勝の パブリックビューイングを実施

2015年7月に女子サッカーワールドカップカナダ大会決勝、日本代表VSアメリカ代表のパブリックビューイングがおこなわれた。スポーツサイエンスコース・松永敬子ゼミの、スポーツイベントの企画・運営の実践学習「なでしこジャパン応援プロジェクト」の一環。昨年のブラジルW杯グループリーグに続いての開催で、スポーツ観戦の楽しさを伝えた。



## 学生が企画した京野菜を使った新商品 「桂うりのスムージー」をモスカフェで販売

本学は、日本経済新聞と共同で連携企業に対して企画提案をおこなう実践型講座を2011年度から実施している。2014年度は「モスカフェ」を展開する(株)モスフードサービスとコラボレーションをおこない、講座参加学生の複数案から「桂うりスムージー」が見事最優秀賞を受賞し、商品化された。1日限定30食が連日完売するなど、売れ行きは好調とのこと。



## 平成27年度将棋西日本大会個人戦 参戦

2015年8月21日、22日に本学でおこなわれた平成27年度将棋西日本大会個人戦に、本学将棋部愛棋会の小林憲治さん(文学部4年生)が参戦した。小林さんは、昨年の第51回赤旗会全国将棋大会赤旗名人戦奈良でも優勝し、今年4月の第44回全国支部将棋名人戦でもベスト16入りしている。



## 東日本大震災復興支援チャリティ コンサート「吹奏楽フェスタin徳島」を開催

龍谷大学と徳島県吹奏楽連盟の共催による、東日本大震災復興支援チャリティコンサート「吹奏楽フェスタin徳島」を2015年6月に開催。龍谷大学生と徳島県の高校生、合計約300名が、震災から4年がたち、記憶から薄れつつある震災の悲劇を風化させない機会になればとの思いを込めて、「音楽」を通じた復興支援をおこなった。



## 学生から学生へ日本酒の魅力伝え普及を はかる第一回日本酒勉強会を開催

2015年6月、経営学部秋庭ゼミの学生が、日本酒の国内マーケット拡大のカギとなる若者への日本酒の普及をはかる勉強会を開催した。日本三大酒処「伏見」の立地を活かし、日本酒の文化と産業を学ぶなかで、若者に日本酒の文化と、その魅力を伝える。今後も定期的に勉強会を開催し、日本酒の文化や産業などについて実践的な研究を進めていく。



## 瀬田キャンパスに「シアトルズベストコーヒー」 を設置、学びを後押しする環境を整備

本学は、「第5次長期計画」に基づき、学生の主体的な活動支援に資する施設の整備などに取り組んでいる。今回、龍谷大学瀬田キャンパス(滋賀県大津市)に、世界規模で展開するコーヒーチェーン店、「シアトルズベストコーヒー」の新店を決定した。滋賀県内での初出店となり、龍谷大学瀬田キャンパス店は2015年9月18日からオープンする。



## 戦後70年“軍都”深草の軍関連遺構を歩く

2015年6月、戦後70年にあたり、深草地域にみられる軍関連遺構を巡る教職員向け研修がおこなわれた。深草地区は、1908年以降、第十六師団の司令部や練兵場、陸軍病院（現 京都医療センター）などの軍事施設が集中して設置され、「軍都」と呼ばれていた。この研修の様子は、8月12日に京都放送「ニュースフェイス」でも放送された。



## 反戦を伝える ベトナム戦争脱走米兵を匿った

本学の深草町家キャンパスにて月1回開催されている「ふかかさ町家シネマ」（企画・運営/政策学部松浦ゼミ生）にて、2015年1月、伏見区出身の元NHKカメラマン小山帥人さんが、47年前に実家に匿った、ベトナム戦争から逃れてきた若きアメリカ海軍兵の映像を、日本・世界で初めて公開した。8月30日の毎日放送「映像'15」では小山さんのその後が放送された。



## 農学部と大津市が連携し、大津の伝統野菜 「坂本菊」「近江かぶら」の栽培に取り組む

本学農学部が大津市と取り組む「大津の特色を活かした地産地消推進モデルの構築」をテーマとした、プロジェクト（環びわ湖大学・地域コンソーシアム採択事業「大学地域連携課題解消支援事業2015」）では、生産量の少ない大津の在来野菜を継承し、生産量の拡大や普及活動をおこなう。将来的には観光施設での販売や加工品の開発をめざしている。



## 第4回REC BIZ-NET研究会 「最新の代謝計測システムと肥満予防」

2015年7月、第4回REC BIZ-NET研究会で、『ヒトの代謝』にフォーカスした健康を志向する研究会を開催。講演内容は、「天国の種抽出物によるエネルギー代謝と体脂肪へ及ぼす効果」、「小動物を用いたスポーツ栄養、肥満予防素材の評価システム」、「基本の食事を見直し美味しく肥満予防」など。交流会ではヘルシーレシピで作った料理やお酒も用意された。



## 「宗教教誨の現在と未来～日本人の宗教意識～」シンポジウムを開催

2015年7月、龍谷大学矯正・保護総合センターは、文部科学省科学研究費助成事業・新学術領域研究（法と人間科学）「犯罪者・非行少年処遇における人間科学的知見の活用に関する総合的研究」と協働して、「宗教教誨の現在と未来」をテーマにしたシンポジウムを深草キャンパス和顔館にて開催。約300名が参加した。



## 「おいしくなくっちゃ！」がコンセプト 「食の嗜好研究センター」始動！

2015年4月の農学部開設と同時に、「食と農の総合研究所」を大学付置機関として設置した。ここに「食の嗜好研究センター」を置き、「おいしくなくっちゃ！」をコンセプトとした、食の嗜好性に関する研究をおこなう。センター内には、日本料理研究班と食品開発における食嗜好研究班を設置する。



## 畑仲准教授が2015年度「内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞」受賞

2015年5月、社会学部の畑仲哲雄准教授が出版した『地域ジャーナリズム：コミュニティとメディアを結びなおす』（勁草書房）が「第5回内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞」に選ばれた。この賞は、ジャーナリズム及びマス・コミュニケーション研究において功績のあった学会員の著作などに対し、隔年で与えられる。本学教員では初めての受賞。



## 近藤倫生教授の研究プロジェクトが水を調べれば生息する魚の種類がわかる新技術を開発

理工学部の近藤倫生教授が代表を務める研究グループは、魚から体表の粘液や糞などとともに水中に放出されたDNA（環境DNA）を分析することによって、DNAを放出した魚の種類を判定する技術を開発した。魚類多様性のモニタリングを、大きな労力と時間をかけずに長期間かつ広範囲におこなえる画期的な手法として期待されている。



## 今年も祇園祭に「京（みやこ）の水カフェ」をオープン、京都の水道水のおいしさをPR

昨年に引き続き、今年7月祇園祭の期間限定で「京（みやこ）の水カフェ」をオープンした。これは経営学部藤岡章子ゼミが、京都市上下水道局と連携し、京都の水道水のおいしさとクオリティの高さ（安全・安心・低価格・環境にやさしい）をPRするもの。京都の水道水を活用した安価なメニューからカフェの店内外の装飾・展示、接客も学生が担当した。



## BON DANCE RYUKOKU 2015 瀬田キャンパス盆踊り大会を実施

7月20日の海の日の夕方、瀬田の涼風に吹かれつつ「BON DANCE RYUKOKU 2015」が開催され、学生や教職員、地域の方々と一緒に盆踊りを楽しんだ。宗教局の学生達による歓喜会（かんぎえ）の法要でスタート。よさこいサークル華舞龍による演舞、大津市の和太鼓グループ湖鼓ROによる演奏と、最後に大抽選会がおこなわれ、大いに盛り上がった。



## 「徳島県U・I・Jターン就職セミナー&出張阿波おどり教室」を開催

2015年7月、深草キャンパスで、徳島県での就職を希望する本学学生を対象に、地方創生の一環とした「徳島県U・I・Jターン就職セミナー&出張阿波おどり教室」が開催された。本学と徳島県は、2011年12月に就職支援に関する協定を締結しており、学内での合同企業説明会や企業懇談会の開催など、県と連携し就職支援の強化に取り組んでいる。



## 「文教の香りある綺麗な街」への取り組み 小学生と一緒に外塀ペインティング

本学は、地域に開かれた大学として「地域住民、行政、大学」が一体となった街づくりを推進し、隣接する地域の「安心・安全」の確保に向けた「文教の香りある街」をめざした取り組みをおこなっている。2015年7月には、学生や教職員も、地域の方々や小学生と一緒に、キャンパス北側にある京都府警察学校外塀のペインティングに参画した。



## 地方創生に向けた日本初・京都発の人材育成システム「地域公共政策士」の新資格制度がスタート

京都市内の公共政策系の学部やコースなどを持つ9大学が6月に、地域資格制度「地域公共政策士」の新資格制度スタートを発表した。地方創生の担い手の育成制度として期待される「地域公共政策士」資格。旧制度では、大学院(修士課程)修了が取得要件だったが、これからは学部、大学院(修士課程)のそれぞれのレベルに応じて取得できるようになる。



## 深草キャンパス第2体育館(仮称)建設の起工式を開催

2015年7月2日、深草キャンパスの課外活動施設拡充に向けた、第2体育館(仮称)の建築工事着工にあたり、起工式を開催した。鉄筋コンクリート造地上3階建の予定。



## ボランティア募集团体合同説明会2015を実施

2015年7月、ボランティア・NPO活動センター主催で「ボランティア募集团体合同説明会2015」を実施した。15団体が出席して、夏休みのボランティアについて説明。ボランティアに興味のある学生約200名が参加し、熱心に耳を傾けていた。この出会いがボランティア活動の最初の一歩になることが期待される。



## 彬子女王殿下、龍谷ミュージアム特別展を御覧

2015年4月、龍谷ミュージアムで開催した「特別展 聖護院門跡の名宝」を、彬子女王殿下に御覧いただいた。聖護院門跡は、ご出家された皇族の方々のご住職をつとめてこられた門跡寺院であり、聖護院の宝物や障壁画について、宮城聖護院門主と石川龍谷ミュージアム副館長から説明をお受けになり、ご鑑賞された。また、1880年に明治天皇行幸の折に立ち寄られた大宮学舎もご視察された。



## 大学コンソ「学まちコラボ事業」に採択 地域の地蔵盆を大学生が盛り上げる

2015年8月、深草キャンパス近隣の川久保町の地蔵盆や東高瀬川清掃活動を「龍谷大学・東高瀬川の環境保護と地蔵盆プロジェクトチーム」が盛り上げた。今年度の大学コンソーシアム京都「学まちコラボ事業」にも採択されている。これからは環境保護・まちづくりに積極的に関わっていく。



## 共に学び共に生きる大学 「ふれあい大学」発表会を2015年12月に開催

大学の地域貢献で重要なことは、大学自身のノーマライズである。知的障がいをお持ちの方と本学教員や短期大学部学生が、共に学び合うための「ふれあい大学」は今年度で14期を迎え、今年の発表会は、12月2日に深草の学友会館で開催される。受講者達がつくり上げた音楽と演劇が楽しめる。入場無料。



次号(81号)より、広報誌「龍谷」が変わります

# A4→A5 に、デジタル版も配信スタート



近年、スマートフォンやタブレット端末の普及が進み、情報発信はますますデジタル化へと加速しています。このような流れを受け、広報誌「龍谷」は、これまでの冊子版とあわせてデジタルブックサービスを利用したデジタル版での配信を開始いたします。

また、デジタル版の配信にあわせて、広報誌「龍谷」の誌面サイズを現行のA4サイズからA5サイズに変更いたします。

これにより、広報誌「龍谷」は、冊子版においては小型化により持ち運びが便利になり、デジタル版においてはスマートフォンやタブレット端末で快適に閲覧いただくことが可能となるなど、読者の皆様にとってより手軽で身近なものとなります。さらに、デジタル版では、これまで冊子版では実現できなかった動画コンテンツやWebならではの新たなコンテンツを今後展開する予定です。

これからも広報誌「龍谷」は、卒業生(校友会会員)をはじめ、多くの読者の皆様のご要望に応えられるよう、進化してまいります。

広報誌「龍谷」の誌面サイズが変わります。(A4 サイズ→A5 サイズ)

- ・現行のA4サイズからA5サイズに変わります。(ページ総数やフォントの大きさは変更しません。)
- ・第81号(2016年3月発行)から変更します。
- ・発行回数は年2回(9月、3月)で、これまでと変わりません。

広報誌「龍谷」のデジタル版を配信します

- ・龍谷大学のホームページ(<http://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/index.html>)から、デジタル版を閲覧できます。(動画など新たなコンテンツの配信開始日は未定です。)
  - ・2014年度以前の卒業生(校友会会員)の皆様には、これまでどおり冊子版の広報誌「龍谷」をお送りします。(デジタル版の閲覧も可能です。)今後、広報誌「龍谷」の閲覧はデジタル版のみで行うため、冊子版の発送を不要とされる方は、各号に綴じ込まれているハガキ、または以下のデジタル版配信申込ページにてお申し出ください。手続き完了以降は、毎号の広報誌「龍谷」刊行ごとに、ご登録いただいたメールアドレスにデジタル版発行のご案内をいたします。
- 広報誌「龍谷」デジタル版配信申込ページ<https://www.ryukoku.ac.jp/pr/digital/>

# 09 | People, Unlimited

龍谷人

## 京都・大阪でショップ展開 ファッションリーダーのメッカ 「LOFTMAN」

株式会社ロフトマン 代表取締役

村井 修平さん

京都・寺町通りの寺町京極商店街。十数年前からファッションストリートとして賑わうこの場所に、若者達の支持を集めるセレクトショップが4店舗ほど点在する。「LOFTMAN 1981」「LOFTMAN COOP KYOTO」「LOFTMAN B.D」「LOFTMAN COOP 'Ohana」。それらを手がけるのは、京都のカジュアルウエアセレクトショップ経営の先駆的存在である株式会社ロフトマンの代表取締役、村井修平さん。商売を始めてまもなく40年の彼の人生は、大学生活のなかで安保論争などの熱い時代を経験したことから勢い良くうねりだした。姫路出身の青年が、京都のファッションを支えるキーマンとなるまでを辿る。

入学したのは70年、学生運動が過激な頃。大学は行ける状況になく、先輩に薦められた小田実氏の著作に感化され、半年ほど海外放浪してみた。貨物船に乗って神戸から沖縄、台湾、東南アジアへ。発展途上の国の人々が、異邦人の自分に食事や宿を提供してくれるなど、とても親切で「自分このままではアカンな」と刺激を受ける。卒業後は中国貿易の会社で働いたが1年ほどで辞め、自分で独立して何かやろうと考え始めた。何でも良かったが、海外放浪時に沖縄基地のフェスティバルで見たアメリカのファッションが忘れられない。そして村井さんは寺町通りの小さなジーンズショップでアルバイトを始める。4坪ほどの店で、当時3200円のジーンズが1日500本飛ぶように売れていった。洋服を扱う仕事に可能性を感じた。半年ほど働いた後、自分で店を始めることに。1976年のことだった。

「一番最初の店は左京区一乗寺のマンション1階の階段脇の6坪の物置。大家さんに交渉して安く貸してもらいました。自分達で改装し、もってきたボックスにジーパンを並べて」

少しずつ顧客がつき、2店舗、3店舗と増やした。「ポール・スミス」を、直営店が日本にやってくる前から扱ったりした。6店舗ほど手がけた創業21年頃(1997年)、集大成として原点の寺町通りに「LOFTMAN 1981」をオープン。カフェを併設する80坪の大

型店である。

「正直お金もそんなになく、これでやめようって気持ちでやりましたね。そのまま終わるのが悔しかった。いつもどこか力を残している感じがしていて、一回どこかで使い切らないと死にきれないと思って。スタッフみんなで改装して店を作りました。それでオープン初日の売り上げ360万。嬉しかった。夜の打ち上げで、カフェ厨房で意識を失い倒れたんです、それぐらい高揚感がありました」

歴史ある商店街、よそ者を警戒しがちと言われる京都の人々。でも通りの掃除を毎朝おこなったりして近隣の方々の信頼も得てきた。「昔みたいなメンズストリートをもう一度」と他ショップも呼び込み、周辺を盛り上げることに尽力した。いま日本で人気のブランド「バタゴニア」も、直営店しか取り扱えなかった頃から2年ほどかけて説得し取り扱うことに。現在、京都寺町通りに4店舗、大阪梅田エリアに4店舗を展開、スタッフは全社で総勢80名ほどに。1店舗あたり、50坪~100坪。今ではネットでの販売も好調なようだ。

「スタッフは三度の飯より服が好き。みんな自分で仕入れたい。でもそれぞれ志向が違うので、店ごとにテーマを決めて。最初の頃から、僕は商品には触らず、スタッフにまかせています。そのほうがいいみたい。僕が出過ぎたらあかんのですよ」

こんな時代だからこそ、次はスタッフの暮らしと社会経済を支えられる企業になっていきたい。各スタッフが書いたライフプランを考慮しながら、ロフトマン全体の方向性を提示し、実践していく。ネットショップの展開、女性の待遇改善、東京出店計画。スタッフの夢によってロフトマンが進化し、ロフトマンによってスタッフは夢を叶えていく。

「僕もそうやったけど、人生をまだしっかり考えたことのない若者達に、好きな仕事して結婚して子どもつくって、ご飯を食べさせられる人間になろう、幸せをつかもうと動きだすきっかけをつくってあげたい。僕に出会って良かった、と思ってもらえる会社になりたいですね」



むらいしゅうへい 1952年兵庫県生まれ、1974年法学部卒業。1976年京都一乗寺にジーンズショップをオープン。その後市内各地で次々とカジュアルファッションのショップを展開し、現在、寺町京極商店街内に4店舗、大阪梅田に4店舗。今では著名ブランドのポール・スミスなどを、日本到来前から紹介してきた。目利きのパイヤー、ショップスタッフを多数抱えており、ファッションに敏感な若者達の支持を集めている。『3W』がモットー。『WAI WAI』コミュニケーションを大切に。『WAKUWAKU』ひとつひとつを楽しく。『WAKATTA』利益をあげて「いいよ、わかった、やろう」と言えること。

# 09 | People, Unlimited

## 龍谷人

### パワードスーツ開発

### 人類の夢を叶えるのは 若き女性エンジニア

機械系エンジニア

松尾 幾代さん

パワー・バリアフリー。年齢や性別に関係なく生活や労働をおこなえる機会を提供し、豊かな社会をつくっていく。これを理念として活動しているのが奈良のベンチャー企業、アクティブリンク株式会社。体に装着して手足など人間の力をアシストする機器「パワードスーツ」の開発を専門におこなう。それに携わる若き設計者が、本学理工学部出身の松尾幾代さん。アクティブリンク社初の女性社員だ(学生時代も機械システム工学科で唯一の女子学生だった)。

「アシストを求めているのは、力に自信がない人。弱い立場の人です。開発中に試着してみるにしても、男性だと重さが気にならなかつたり細かいアシスト感を感じにくかつたり。私みたいに力仕事不得意じゃない人間のほうが逆に、細かな課題に素早く気づくことができるのかもしれない。そうして従来より動きやすいタイプのパワーローダーライトが生まれました」

すでに開発されていた、力の増幅を目的とした全身型の「パワーローダー」は、スイッチ等で動作切り換えをするのではなく、ロボット自体が人の挙動をセンサで察知して動作し、さらに人も機器の挙動をその瞬間に感じることができる「ダイレクトフォースフィードバック」を特徴とする。ロボットと人の息が合いやすく、使いこなしやすい。ただ、ハイパワーではあるが重厚すぎて存在感がある。それに対して、扱うパワーは少し落ちるが、より軽量化し装着しやすくスマートにしたものが「パワーローダーライト」。松尾さんは技術系でたった一人の女性社員として、それをはじめとする開発機器の骨組みを担当。間接の動きや強度を考えながら、モーターや歯車を組み合わせて設計していく。動きを制御する方法を考えるシステム担当や、外装を整えるデザイン担当と相談しながら。

まるで、弱虫な主人公が変身してロボスーツを装着し、パワーアップして人助けをする、まさにヒーローものの世界が現実化してしまうのではないかとまでイメージしてしまう!そんな分野で輝きだした女性、松尾さんの思いとは。

「就職活動のときに、理系技術職というのもあって余計、男性有利な場面を多く感じて。女性で機械設計は珍しくて敬遠されて『結婚、出産したらどうするの』と聞かれたり、設計じゃなくて設計補助はどうだと言われたり。なにか女性が嫌がられる原因があるんだなと思いました。でも、それを逆に活かす方法を考えて切り込んでいかないと、社会に出て女性の存在をアピールすることさえできないと思い、そこで自分なりに考えるようになりました。どうしても、ものづくりがしたかったので」

最初に勤務した装置機器メーカーには、「自分なら女性ならではの配慮の行き届いた設計ができる」と伝え、受け入れてもらった。現在の職場でも、弱い立場の人のためのアシスト機器だからこそ、女性の視点や細やかな感性が活かせる。パワーローダーライトも、より「着こなす」という感覚に近づくように改良を続けている。結果、世界が目を見張る技術が生まれる。「弱みを活かすことが、社会を豊かにする」と松尾さんは言う。

「自分の弱みにはチャンスが隠れていました。弱みを隅に置き無視したら、社会は改善されません。逆に活かしていけば、世界は良くなっていきます」

彼女はアクティブリンク社で、同じ本学卒の男性エンジニアと出会い結婚、11月には第一子を出産予定だ。結婚・出産・育児。女性の喜びであると同時に、キャリア社会では難関視されがちな時期にこれから突入していく。

「社長からは、『両親ともにロボエンジニアという特殊な環境の子がどう育つか楽しみだ』と言われてます(笑)。出産で仕事のブランクはできてしまうんですが、毎日会社で仕事をしていると、もうちょっと時間をかけてこのへんを勉強してみたいな、という部分が出てきても、なかなかじっくり向き合えません。育児休暇を活かして、時間をうまくつくって勉強期間にしていけば、また違うものを生み出せるかもしれないなと思っています」と松尾さん。育児経験でパワーアップした彼女が、さらに深い視点でもって活躍していく未来が楽しみだ。



**まつおいくよ** 1983年滋賀県生まれ、2006年理工学部卒業。学生時代には書道部に所属。神戸の装置メーカー勤務を経て、現在、ロボティクス系機械ベンチャーであるアクティブリンク株式会社設計担当。最先端ロボティクス「パワーローダー」の設計を担い、女性ならではの視点から、小型で軽量の「パワーローダーライト」を生み出す。機械工学分野では希少な女性エンジニアとして、TEDxTodayでも講演。2015年11月に第一子出産予定。

## 龍谷人

### 人間の弱さを受け止める 矯正施設

法務省 高松矯正管区長

木村 昭彦さん

矯正管区とは法務省の機関で、刑務所、拘置所、少年院、少年鑑別所などの適切な運営管理を図るために全国を8区に分けて設置されている。高松矯正管区はその一つで、四国4県の刑務所4施設、少年院3施設、少年鑑別所4施設ほか合計18の施設を管轄し、運営全般を指導監督する。2015年4月よりその高松矯正管区長をつとめるのが木村昭彦さん。

もともと刑法に興味があった木村さんは、在学時に故・繁田実造氏（龍谷大学名誉教授、2003年逝去）の刑事訴訟法のゼミに所属した。繁田先生に薦められたのが、開講したばかりの矯正課程だった。施設見学や教諭師と関わる機会など仕事につながる実践的な学びが多く魅力も感じたが、刑事施設はまだ「監獄」と呼ばれており「こんな日の目を浴びないような仕事について大丈夫だろうか」とつぶやいたこともあった。

「すると先生が『それなら自分で光を当てればいいじゃないか』と。そもそも法の世界が面白いと思ったのは、条文の中身を支える考え方が必ずあるから。刑法のテーマは人間的な弱さ。それを良いか悪いかじゃなく、どう受け止めていくかということ。悪かったと後悔して生きはじめると、最後までシラを切る人、いろんな人がいて、人間だから持っている弱さや優しさというのを、法の執行で受け止めていく、そうしないと、なかなか世の中良くなっていけない。興味深いと感じたからなんですよ」

卒業後、最初に勤務した京都拘置所はまさに現場仕事。真面目に大学を卒業した木村さんからするとはじめは「こんな世界があるんだ」という驚きもあったが、個人で対応するわけではなく、組織として対応していくルールによってすぐに割り切れた。

「矯正施設の勤務については、映画や小説の世界のイメージで怖いと思われがちですが、被収容者との関わりも普通の人と同じです。これは、自分達の仕事や取り組みを社会に発信する努力が少し足らなかったのです。ところが最近になって、関係機関などとの連携強化が重要になっています。広報活動が必要と

なっているのです」

犯罪者の状況も社会も複雑化していて、受刑者の社会復帰の問題に関してはもはや、矯正施設だけでは解決できなくなっているという。

「障がいがあって、本当は福祉の世界でケアされるべき人が、多様な事情でそれができなくて、犯罪を犯してくる。出る時に帰るところもないし、就職もないし、というのが現状。犯罪に戻らせないには、障がい者が福祉施設できちんとケアされるようバトンタッチできたり、地域生活定着支援センターと協力して住んで働ける場所を提供してもらい、NPO法人の力を借りてとにかく今日寝る場所を確保するなど、刑事司法の世界だけではなく、大きな流れで様々な組織と連携していく必要があります」

犯罪者の傾向で最近感じるのは、発達障がいや人格障がいにより、環境になじめなかったり、コミュニケーションがうまくできない、そういう人が自暴自棄になるケース。メールや電話などコミュニケーションの取り方の変化も一因と感じると木村さんは言う。

「私達が対応すべきなのは、世の中の動きや人の変化だと感じます。そのなかで受刑者は生まれる。矯正施設のスタッフは、もっと外のことに関心をもつべきですね。そういう意味では、大学でも一つの専門だけではなく隣接分野の学びが必要だと思います。1年生のときに、基礎ゼミで、戦後世界政治を学んだことを思い出します。これも厳しい先生でしたし、興味があった法律とは離れていた。でも自分の専門の研究を違った観点からも立体的に見られるようになることで、結果的に自分の研究の大事なことへの理解が早まりましたね」

時には、出所者から職員宛に温かい手紙が届くこともある。人間の弱さと同時に、その強さも感じるという。木村さんが人間を見るときには、希望が常に抱かれているように思える。矯正を受け入れる社会側も、少しは希望的に変化していけるだろうか。



**きむら あきひこ** 1955 年京都府生まれ、1979 年法学部卒業。法務省矯正局の刑務官として、京都拘置所、大阪矯正管区、法務省矯正局などへの勤務を経て、旭川刑務所長（北海道）、近畿地方初の PFI 手法による刑務所である播磨社会復帰促進センター長（兵庫）、立川拘置所長（東京）、月形刑務所長（北海道）、川越少年刑務所長（埼玉）を歴任。現在、高松矯正管区長（香川）。

\*値段はすべて税込価格で表示

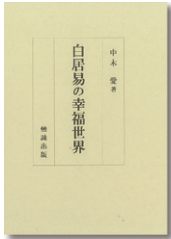
\*Book Cafeについては龍谷大学学長室（広報）まで

01

『白居易の幸福世界』

中木 愛(文学部講師)著者

出版助成



日本でも広く愛された唐代の詩人白居易は、「閑適詩」という新たな詩のジャンルを確立し、人間の本性に根ざした幸福のありかたを追求した。本書は自然・衣服・睡眠・酒・音楽の詩を中心に、そこに構築された幸福世界の様相を明らかにした。一つひとつの語彙に細かな検証を加えながら、平易な表現の奥にある創意工夫を探り、その文学的価値に迫る。

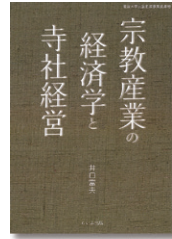
2015年2月刊/411頁/勉誠出版/13824円

02

『宗教産業の経済学と寺社経営』

井口 富夫(元経済学部准教授)著者

出版助成



宗教を特別視せず、宗教産業を他の産業と同列の産業として捉え、経済学の観点からその実態に迫っている。本書では、宗教産業とは、宗教サービスを提供する宗教法人をはじめとした宗教企業の集まりである。全体で3部9章からなっている。「第1部 宗教産業の経済学」、「第2部 寺社経営と門前町」、「第3部 寺社経営とホスピタリティ」である。

2015年2月刊/295頁/らいふ出版/3675円

03

『国際法における緊急避難』

山田 卓平(法学部教授)著者

出版助成



国内法(特に刑法)では緊急避難が規定されることが多いが、国際法上の緊急避難は、濫用の歴史ゆえに批判されてきた。しかし逆説的だが、国家緊急事態でも法の支配を確保するために、緊急例外は必要ではないか。本書は、そのバランスをめざして、緊急避難の規範状況を実証的かつ精密に探究し、今後向かうべき方向を示した。

2014年12月刊/215頁/有斐閣/4320円

04

『公正な刑事手続と証拠開示請求権』

斎藤 司(法学部准教授)著者

出版助成



本書は、日本の歴史を検討することにより日本の証拠開示問題の具体的内容を明らかにし、その問題の解決手段を、ドイツにおける証拠開示制度の論理と具体的内容を参照しながら示したものである。さらに現在問題となっている捜査段階や再審請求手続における証拠開示についても検討している。

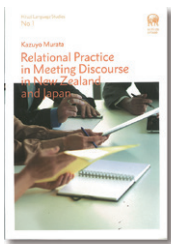
2015年2月刊/410頁/法律文化社/5832円

05

"Relational Practice in Meeting Discourse in New Zealand and Japan"

村田 和代(政策学部教授)著者

出版助成



日本とニュージーランドの、実際のミーティング談話を社会言語学の観点から分析した、職場談話研究の書である。Relational Practice(対人関係機能面に関わる相互行為)としてのユーモアと、スモールトークの特徴を明らかにし、異文化間コミュニケーションにおけるそれらの使用の評価を分析している。

2015年2月刊/261頁/ひつじ書房/6480円

06

『社会福祉スーパービジョン論』

山邊 朗子(社会学部教授)著者

出版助成



現代ソーシャルワークの観点から社会福祉のスーパービジョン(SV)について理論面、実践面両面から論じた書物。現代ソーシャルワークの理論に即したSVの理論と実践的に社会福祉現場に導入・展開・定着させるための方法論を論じた。日本の社会福祉現場の現状を鑑みて、実践者のパナウトの予防、福祉人材の育成、支援の質の向上、支援の管理、働きやすい職場の実現などの様々な課題の解決を達成するためのSVの展開を示している。

2015年2月刊/214頁/ミネルヴァ書房/2700円

07

『地域ジャーナリズム:コミュニティとメディアを結びなおす』

畑仲 哲雄(社会学部准教授)著者

出版助成



廃刊目だった新潟の新聞社がNPOと協働して地域の問題解決に取り組み、自らも企業再生に成功した。本書は、メディア倫理から逸脱するとされ捨象されてきたこの事例を、コミュニタリアニズム思想やアドボカシー論を援用して再評価した。ジャーナリズムの規範論に新しい領域を拓いたとして、2015年度の内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞を受賞した。

2014年12月刊/413頁/勁草書房/5184円  
書評「琉球新報」2015年4月19日、「週刊読書人」3087号2015年4月24日、  
東京大学生協書評誌「ほん」391号2015年5月18日

01

龍谷大学社会科学研究所叢書第104巻

『中国乾燥地の環境と開発—自然、生業と環境保全—』

北川 秀樹(政策学部教授)編著

共同研究

活動



本書は、社会科学研究所指定研究「中国西北部・乾燥地における大規模開発と環境保全政策に関する研究」の成果であり、中国西北部を扱った数少ない著作の一つである。自然科学、社会科学及び人文科学の研究者が、中国西北地域の厳しい自然の現状、生業(農林業)、環境保全対策などを専門の視点のみならず学際的に考察している。また、研究協力を受けた陝西省林業庁の技術職員の論文を特別寄稿として掲載している。

2015年2月刊/337頁/成文堂/5400円



## 02

### 共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書第105巻  
『ディーセント・マネジメント研究—労働統合・共生経営の方法—』  
重本 直利(経営学部教授)編著



働きがいのある人間らしい労働(ディーセント・ワーク)の課題はすぐれてマネジメントの課題である。マネジメントという概念を企業内・事業内だけでなく社会的かつ市民的な広がりの中で捉える。本書では、具体的な労働統合・共生経営のあり方を論じ、市民のマネジメントとしてのディーセント・マネジメントを提唱する。

2015年3月刊/434頁/晃洋書房/5400円

## 03

### 共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書第106巻  
『健康づくり政策への多角的アプローチ』  
河合 美香(法学部准教授)編著



少子高齢化社会の到来に伴い、健康寿命(心身ともに自立し、健康的に生活できる期間)の遅延への対策が急務となっている。健康には、栄養と運動、休養の三要素が重要だが、ほかに経済的な背景や社会的環境、学校における健康教育などの様々な要因が直接、また間接的に影響する。本書では、健康づくりの現状や政策、課題について多角的なアプローチを試みた。

2015年3月刊/268頁/ミネルヴァ書房/3024円/書評「地域保健」2015年7月号

## 04

### 共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書第107巻  
『島嶼経済とコモンズ』  
松島泰勝(経済学部教授)編著



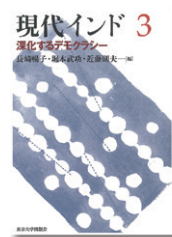
琉球列島、太平洋諸島、大陸農村地域をフィールドとし、島嶼経済論とコモンズ論の比較研究を通じて、基地経済の実態、島嶼や農村における内発的発展やコモンズの可能性、平和創出のための理論や政策を展望した。サブシステムやコモンズ存在を脅かす政策や強権の抑圧を、基地問題、外交問題などを通して明らかにした。

2015年3月刊/256頁/晃洋書房/3780円/書評「琉球新報」2015年6月21日付

## 05

### 共同研究活動

人間文化研究機構「現代インド地域研究」  
『現代インド』全6巻  
第1巻:杉原 薫(経済学部客員教授)編著、長崎 暢子(人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー)著者、第3巻:長崎 暢子 編著、第4巻:鍛塚 賢太郎(経営学部准教授)著者、第5巻:中根 智子(国際学部講師)、舟橋 健太(客員研究員)著者



変貌する現代インドの姿に関して、学際的・長期的・多角的な視野からの検証・考察が試みられている。全6巻、補論も含めて111本の論考が収められている。龍谷大学も一拠点として参画している、人間文化研究機構による全国的な地域研究推進事業「現代インド地域研究」第一期五カ年(2010~2014年度)の成果刊行物。

2015年3月刊/356頁/東京大学出版会/5832円(第3巻)

## 06

### 共同研究活動

龍谷大学仏教学叢書4  
『俱舎—絶ゆることなき法の流れ—』  
青原 令知(文学部教授)編著



本学仏教学科の伝統教学を扱う講座シリーズの第4弾。既刊の唯識・西域・天台に続き、次回華嚴により完結する。今回扱う「俱舎」とは、インドから日本にいたるまで絶ゆることなく受け継がれてきた、仏教の基礎学の伝統である。本書は密林とも称される複雑な俱舎の体系を、内外の第一線研究者達が紐解く俱舎学入門書である。

2015年3月刊/476頁/自照社出版/2592円

## 01

### みんなの本棚

『ビジネスパーソンのためのスウェーデン式会計力のレッスン』



吉松 隆(1991年度文学部卒業/経営コンサルタント/東京都)翻訳

すべてのビジネスパーソンが会計の本質を極めることで、職務の質がより高いものになるだろう。日々の業務と財務数値のつながりを実感できる一冊。ビジネスをゲーム感覚で捉えることで、人やノウハウ、アイデアといった見えない資産がビジネスに与える影響が大きいことに驚かされる。

2015年3月刊/120頁/ディスカヴァー・トゥエンティワン/1404円

## 02

### みんなの本棚

『繭のような白き時間』  
池田 幸子(1969年度短期大学部卒業/愛知県)著者



「繭のような白き時間に頭下げお椀に受ける花びらごはん」—1995年から15年間の介護や保育現場などの社会詠を含んだ465首がまとめられている。第2歌集。

2015年2月刊/221頁/青磁社/2700円

## 03

### みんなの本棚

『精神障害者の経済的支援ガイドブック—事例とQ&Aから理解する支援の意義と実務』



青木 聖久(2011年度社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程修了/大学教授/愛知県)編著

本書は、経済的支援の意義やQ&Aを記載したことに加えて、支援者の心の声を描写した事例を掲載。果敢に、実践的に役立つものになるよう迫った。

2015年7月刊/214頁/中央法規出版/2808円

## 出版情報

### 01:『企画のつくり方』

原尻 淳一(龍谷大学経済学部客員教授)著者

発想・コンセプトづくりから戦略立案、プロモーション設計、プレゼンテーションまでの全プロセスを解説する「企画づくりの教科書」である。

2015年5月刊/195頁/日本経済新聞出版社/929円

### 02:『菅原智洞集』

日下 幸男(文学部教授)単著

江戸時代中期の勤化僧である菅原智洞(1728~1779)の著書三点(浄土勤化 言々海・説法魏々編・浄土勤化論語)を影印で収録し、解題を付す。

2015年3月刊/602頁/私家版(龍谷大学文学部日下研究室)/非売品

### 03:『メタ表示と語用論』

東森 勲(龍谷大学文学部教授)共編著

本書は、メタ表示と語用論の3分野(発語行為条件文・否認・英語のジョーク)を扱ったもので、人間固有のメタ表示能力の解明につながれば幸である。

2015年3月刊/212頁/開拓社/3024円

### 04:『共生の現代的探求―生あるものは共にある―』

重本 直利(経営学部教授)共編著

人間が人間らしく生きるための共生思想と方法を求めて、人間の社会的な関係価値とその共生的実践に着目する。

2015年3月刊/211頁/晃洋書房/2700円

### 05:『子どもの貧困/不利/困難を考えるII―社会的支援をめぐる政策的アプローチ』

大塩 まゆみ(社会学部教授)共編著

不利・困難をもちながら暮らす母子家庭や若者の実態や児童養護施設・母子家庭支援施設での社会的支援などについて調査研究した成果をまとめた。

2015年7月刊/274頁/ミネルヴァ書房/4104円

### 06:『天皇はいつから天皇になったのか?』

平林 章二(文学部教授)著者

古代天皇の名前、『古事記』にのみ見える「日の御子」の歌、天皇が当初は仏教信仰を受容できなかったことなどから、その存在理由を解明する。

2015年7月刊/308頁/祥伝社/907円

### 07:『日本書紀と古代の仏教』

故 日野 昭(文学部名誉教授)著者

『日本書紀』と『元興寺伽藍縁起』を比較検討し、史実を追究。欽明~推古にいたる天皇と、蘇我氏・物部氏・大伴氏などの動向を解明する。

2015年6月刊/275頁/和泉書院/3240円

### 08:『保険福祉学―当事者主体のシステム科学の構築と実践―』

栗田 修司(社会学部教授)共著

災害とメンタルヘルスの節で主にPTSD(外傷後ストレス障害)の予防と、地域レベルでの災害支援システムの重要性を示した。日本保健福祉学会編

2015年3月刊/214頁/北大路書房/2376円

### 09:『身近なテーマから広げる!にほんご語彙力アップトレーニング』

木下 謙朗(経済学部講師)共著

初級終了レベル以降の日本語学習者を対象とした総合日本語教材。学習者の「これが言いたい!」という気持ちに応えることを目標としたテキスト。

2015年3月刊/100頁+別冊44頁/アスク出版/1944円

### 10:『人口減少社会の雇用』

西川 清之(経営学部教授)著者

人口減少が進むなかで、若者・女性・高齢者・障害者・外国人労働者の雇用の未来がどうなるかを、ピンポイント的に考察した。

2015年4月刊/240頁/文眞堂/2970円

### 11:『こどもと関わる(改訂版)』

龍谷大学短期大学部こども教育学科編

2013年3月刊行された初版の改訂版。実習の before & after はもちろん、保育者の成長を確かに支えるサブテキストである。

2015年6月刊/191頁/ブイツーソリューション/1131円

### 12:『メンタルヘルスを学ぶ』

赤田 太郎(短期大学部准教授)共著

こころの健康という課題に精神医学・内科学・心理学の視点から向き合い学びを深める書。また職場でのアプローチやケアについて紹介している。

2015年4月刊/234頁/ミネルヴァ書房/2592円/書評「京都新聞」

2015年7月12日

### 13:『パフォーマンス向上に役立つサッカー選手の体力測定と評価』

長谷川 裕(経営学部教授)翻訳

間欠性持久力、スピードなどサッカーという競技特性に見合った専門的体力の科学的測定法と評価法について欧州で高く評価されている名著の翻訳。

2015年2月刊/107頁/大修館書店/2376円

### 14:『楽しく豊かな「道徳の時間」をつくる』

牧崎 幸夫(文学部教授)編者

小中学校の道徳の時間における授業構成の理論と、定番資料を使った授業の指導案や授業記録が満載。道徳の教科化に向けてなくてはならない一冊。

2015年4月刊/204頁/ミネルヴァ書房/2808円

### 15:『共生の言語学―持続可能な社会をめざして』

村田 和代(政策学部教授)編者

土山 希美枝(政策学部教授)、松浦 さと子(政策学部教授)、山田 容(社会学部准教授)共著、深尾 昌峰(政策学部准教授)座談会出席

本書は、持続可能な社会につながる実践的な言語・コミュニケーション研究の報告に、医療・政策・環境分野などからの視点を加えた論文集である。

2015年2月刊/252頁/ひつじ書房/3672円

### 16:『市民の日本語へー対話のためのコミュニケーションモデルを作る』

村田 和代(政策学部教授)、深尾昌峰(政策学部准教授)共著

民主主義の基盤となる対話や話し合いをどう生み出し育てていくかについて、社会言語学やNPO論、民俗学、社会学といった異なる分野から議論している。

2015年3月刊/152頁/ひつじ書房/1512円

### 17:『歎異抄のことば』

玉木 興慈(短期大学部教授)著者

『歎異抄』から22の言葉をとりあげ、著者の経験を通して、浄土真宗のみ教えとその味わいを、親しみやすい内容で現代人に伝える。

2015年6月刊/212頁/本願寺出版社/756円/書評「中外日報」

2015年

### 18:『ドイツ文化55のキーワード』

國重 裕(経営学部准教授)共著

ドイツ文化について歴史、政治、娯楽、食事など55の観点からわかりやすく案内する入門書。オーストリア、スイスも扱っている。

2015年3月刊/260頁/ミネルヴァ書房/2500円

### 19:『20世紀物理学史(上)(下)』

小長谷 大介(経営学部准教授)翻訳

量子力学と相対論という二つの革命から始まった「物理学の世紀」を一望する名著、待望の邦訳。

2015年7月/(上)299頁・(下)332頁/名古屋大学出版会/各3888円

### 20:『ボランティアコーディネーション力〜市民の社会参加を支えるチカラ』

簡井のり子(社会学部教授)共著

市民の「参加の力」を活かして組織の発展や自治的な社会づくりを進めるために、不可欠であるボランティアコーディネーション力について論じた。

2015年6月刊/193頁/中央法規出版/2376円

## 広報誌「龍谷」からプレゼント!

龍谷ミュージアムペア招待券 .....5組10名様  
龍谷カレー3個パック.....5名様



ご希望の方は、はがきにご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号(龍谷大学関係者は卒業年度・学部なども)及び広報誌「龍谷」の感想・意見、あなたの近況などを書き添えてご応募ください。感想や近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。あて先は右記「プレゼント」係まで。

締め切りは12月11日(金)必着。

応募多数の場合は抽選で。当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

### 広報誌『龍谷』80号 読者アンケートのお願い

今後のよりよい広報誌づくりのため、  
同封のアンケートにて皆様のご意見をお聞かせください。

なお、アンケートは、  
<https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/>  
からも回答していただけます。



### お詫びと訂正

前号(79号)の文中に以下の誤りがございましたので、お詫びして訂正いたします。

・P02 右段 上から15行目 (誤)367年 → (正)376年

・P48 左段 出版情報

O2:『Multiculturalism and Conflict Reconciliation in the  
Asia Pacific:Migration,Language and Politics』

(誤)非売品

→(正)オープンアクセス(※インターネット上でご覧いただけます。)

(誤)清水耕介(国際学部教授)編著

→(正)清水耕介(国際学部教授)・ウィリアム・ブラドリー(国際学部教授)編著

## 読者のひろば

学長とは同級生ですが、その見識の高さには平伏します。高村さんもすばらしい考えの持ち主です。

(1972年卒業生 H)

4年間、毎回楽しみに読ませていただきました。子どもが在籍する学部以外のいろいろな学部のことや活動のことが知れて、とても充実した気持ちになります。

(卒業生保護者 O)

久しぶりに実家に帰り、広報誌「龍谷」を見ました。龍谷人に芸人さんやシンガーソングライターの方がいることを知りました。皆さん、それぞれの道でがんばっておられて素敵だなと思いました。

(卒業生 K)

次男が経済学部4回生です。龍大から送ってくる広報誌を楽しみにしています。お世話になるのもあと1年になりました。次男は龍大に入ってから勉強に集中するようになりました。学校や授業が楽しそうです。龍大で本当に良かったです。

(学生保護者 T)

本学卒業生の保護者ですが、「龍谷」を拝読しておりますと、当時の頃が懐かしく思い出され、とても感慨深いものがありました。

(卒業生保護者 M)

### お便り待っています

「読者のひろば」へのお便りをお待ちしています。  
また、「龍谷人」などへの推薦や情報をお寄せください。  
いずれも以下のあて先まで。

### 《プレゼント・お便りのあて先》

龍谷大学 学長室 (広報)  
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67  
電話:075(645)7882  
FAX:075(645)8692  
E-mail:kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

編集委員 青戸 英夫、新井 潤、安食 真城、石橋 良太、  
井手 健二、乾 真理、落合 雪野、笠井 賢紀、  
上手 礼子、加茂 陸、末原 達郎、高橋 正行、  
出羽 孝行、徳田 眞三、友永 雄吾、仁井田 都、  
橋本 祐子、藤原 直仁、松浦 さと子、松本 賢、  
宮浦 富保、山口 大、若林 雅子(50音順)

事務局 増田 滋彦、田中 秀樹、阿部 法子、田中正徳

### 広報誌「龍谷」80号

2015年9月11日発行

編集:龍谷大学編集委員会

制作:龍谷大学学長室(広報)

発行:龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075(642)1111 (代表)

龍谷大学ホームページURL

<http://www.ryukoku.ac.jp>



龍谷大学  
RYUKOKU UNIVERSITY